

326

308



始



時局影響調查

第九回

綿織物業概觀

名古屋商業會議所

經濟調查部

326-308



時局影響調查

第九回

名古屋商業會議所
經濟調查部編纂

綿織物業概觀

全

名古屋商業會議所發行

【大正六年十二月調查】



例言五則

一 我が名古屋市に於ける一般織物業は、愛知縣に於ける斯業と等しく、其の事業者數及び製産額に於て、本市に於ける一般製造工業中、嶄然其の頭角を現はし、現歐洲戰亂の好影響を蒙り、最近に於ける發展は實に顯著なるもの有つて存し、其の消長盛衰の如何は、延いては以て本市商工經濟界に波及するに至るや、蓋し大なるものあり。然り而して本市に於ける綿織物の製産額は、一般織物業の製産額に對し、實に三分の二内外の多額を占むるを以て、綿織物業の状況を調査攻究せば、勢ひ一般織物業の大勢を洞察するに難からず、之れ特に綿織物業のみの調査を公にする所以なり。

二 本市に於ける綿織物の製産額は、綿絲と伯仲の間でありて、其他の工産品を遙に凌駕し、實に巨大なる製産額を出せり。然りと雖も、之を本邦は勿論、本

市及び其の勢力圏内以外に於ける愛知縣郡部と比較考照せんか、著しく遜色あること、正に綿絲と其の趣を一にせり。故を以て、本市に於ける斯業の狀勢を調査攻究せんと欲せば、須らく本縣郡部に對する地位を闡明するの必要あること、之れ亦綿絲に於けると異ならず。之れ本編に於ても亦、本縣郡部は勿論、進んで本邦に於ける斯品の製産額、其他一般の狀勢を概叙したる所以なり。

三 本市に於ける綿織物は各種の綿布を主とし、其他の綿織物は實に僅少なるを以て、各種の綿布殊に輸出向廣幅綿布に對し主力を傾倒せるの結果、之を綿織物業と言はず、單に綿布業と稱するも、敢て不可なきが如しと雖も、而かも一般的各種の綿織物を含有せるを以て、便宜上廣汎的名稱に従へり。

四 綿織物業に要する原料は綿絲を主とし、該品と互に密接なる關係を有するを以て、其の調査攻究上に於ても、綿絲紡績業と關聯せるもの鮮少ならず。例へば原料綿絲は勿論、燃料或は動力、荷造材料、運輸機關、運賃、及び保險料等の

如し。故に是等の事項は、重複を厭ひ簡略に叙説したるを以て、其の詳細を知らんと欲せば、乞ふ前回の調査に係る『綿絲紡績業概観』に就て窺ふ所あるべし。

五 本編努めて完全を期せりと雖も、由來綿織物の種類は頗る夥しきのみならず、短日月の日子を以て完成を急ぎしの結果、書中或は精確を缺き、妥當を失するものなきを保せず。幸に大方讀者諸士の叱正に據り、校訂を爲すに吝ならず。乞ふ之を諒せよ。

大正七年一月

編 者 識

時局影響調査 綿織物業概観目次

上編 總論

第一章 綿織物業發達の大勢

第一節 緒言

第二節 綿織物の沿革及び發達の大要

第三節 開戦後に於ける狀況

第二章 本邦綿織物業の發達概観

第一節 斯業發達の趨勢

第二節 織布會社發達の趨勢

第一項 事業の規模

第二項 製造經營の狀況

第三項 製品の種類

第三章 綿布及び綿製品の對外需給

目次

第一節 綿布及び綿製品の輸移出概観……………一三

第二節 綿布及び綿製品の輸出……………一五

 第一項 綿 布……………一五

 第二項 綿 製 品……………一八

第三節 綿布及び綿製品の輸移入概観……………一九

第四節 綿布及び綿製品の輸入……………二一

 第一項 綿 布……………二一

 第二項 綿 製 品……………二四

第四章 原絲の需給……………二四

 第一節 供 給……………二四

 第二節 需 要……………二七

中編 時局と名古屋市綿織物業……………二八

第五章 名古屋市綿織物業の地位……………二八

 第一節 愛知縣織物業に於ける綿織物……………二八

第二節 名古屋市綿織物業の愛知縣綿織物業に於ける地位……………二九

第三節 廣幅綿布の綿織物上に於ける地位……………三一

第四節 各種綿布の綿織物上に於ける地位……………三四

 第一項 綿布一斑及び其他の綿織物……………三四

 第二項 綿 毛 布……………三六

第五節 全國及び樞要地方との比較……………三七

 第一項 全國綿織物との比較……………三七

 第二項 樞要地方に於ける綿織物との比較……………三八

 第三項 樞要地方に於ける廣幅綿布との比較……………三九

第六章 製造上に及ぼしたる影響……………四三

 第一節 戦前及び開戦後に於ける製造状態……………四三

 第一項 綿織物一斑……………四三

 第二項 廣 幅 綿 布……………四九

 第二節 事業擴張の状況……………五三

 第一項 綿織物一斑……………五三

目次

第二項 廣幅綿布……………五八

第三節 原 絲……………六一

 第一項 製 造 量……………六一

 第二項 價 格……………六三

 第三項 在 荷 狀 况……………六四

第四節 燃料及び動力……………六五

 第一項 石 炭……………六五

 第二項 電 力……………六六

 第三項 價 格……………六八

第五節 荷造材料及び荷造費……………七一

 第一項 荷 造 材 料……………七一

 第二項 荷 造 費……………七二

第六節 職 工 賃 金……………七二

第七章 販賣上に及ぼしたる影響……………七四

 第一節 取 引 方 法……………七四

第二節 海外輸移出……………七四

 第一項 輸 出……………七四

 第二項 移 出……………七八

第三節 内 國 貿 易……………八〇

 第一項 海 運……………八〇

 第二項 陸 運……………八一

第四節 在 荷 狀 况……………八二

 第一項 出 入……………八二

 第二項 在 荷……………八三

第五節 價 格 の 變 動……………八五

 第一項 市 况 概 観……………八五

 第二項 輸 出 向 綿 布……………八六

 第三項 内 地 向 綿 布……………九〇

第六節 仕 向 地 の 變 遷……………九三

第七節 仕 向 地 に 於 ける 嗜好 其 他 の 變 遷……………九四

第八節 仕 向 地 に 於 ける 競 争 品 と の 關 係……………九五

目 次……………五

第八章 金融上に及ぼしたる影響

第一節 資金運用……………九七

第二節 金利の變動……………一〇二

第三節 海外爲替取組……………一〇四

第四節 海外爲替相場の變動……………一〇六

第五節 代金決済……………一一〇

第九章 運輸上に及ぼしたる影響

第一節 運賃の變動……………一一〇

 第一項 海運……………一一〇

 第二項 陸運……………一一四

第二節 船腹及び貨車需給の狀況……………一一六

 第一項 船腹……………一一六

 第二項 貨車……………一一八

 第三項 小運送……………一二八

第三節 保険料の變動……………一二九

下編 戦後に於ける經營政策

第十章 製造經營の方針

第一節 將來の經營又は組織……………一二〇

第二節 製品の改良……………一二二

第三節 燃料及び動力費の低減……………一二三

第四節 技術者の養成及び職工徒弟の教育……………一二三

第十一章 販賣政策

第一節 販路擴張の方法……………一二五

第二節 販賣方法の改良……………一二六

第三節 聲價維持の方策……………一二七

第四節 競争品に對する方策……………一二七

第十二章 金融政策

第一節 資金運用の圓滑……………一二八

目次

八

第二節 爲替取組及び代金決済の便宜助長……………一二九

第十三章 運輸政策……………一二九

第一節 船車の補充及び運賃の低減……………一二九

第二節 航路の充實……………一三一

時局影響 綿織物業概観目次 終

時局影響 綿織物業概観

上編 總論

第一章 綿織物業發達の大勢

第一節 緒言



我が愛知縣は古來織物業旺盛にして、本縣經濟界の消長は、一に同業の盛衰如何に因りて岐れ、就中木綿の如き綿織物の製造最も發達し、尾張木綿の名は夙に世の知る所となり、全国各地へ移出せらるゝ數實に夥しく、爾後綿絲紡績業の勃興に伴ひ、從來の小幅綿布の外、更に機械織廣幅綿布の製造勃興するに至り、益々綿織物業の隆盛を來たさしむるに至れり。

本邦に於ける綿織物製産額が、總織物製産額に對し、最近六割以上に達し、實に織物界の消長は、主として綿織物界の盛衰如何に繋れると等しく、本市は勿論本縣に於ける斯界も亦同様の趨勢を保てり。而して更に綿織物業の消長、或は綿織物市場の盛衰如何は、又其の原料たる綿絲の浮沈と密接なる關係を有するを以て、過去に於ける綿布若くは一般綿織物界が、内外需要地に於ける事情に影響さるゝを除外しては、略ぼ原料綿絲の商勢に隨伴したるは、蓋し自然の數と稱すべし。

第二節 綿織物の沿革及び發達の概要

本邦に於ける綿織物は勿論、綿布の種類は頗る多く、且つ其の起源は遠く古代に存し、爾後幾多の變遷を経て、今日の大を來たせるの結果、本市若くは本縣の斯業も亦之れと隨伴して、略ぼ同様の趨勢を保てり。然れども本市若くは本縣の斯業は地方的關係の下に發達せるを以て、其の種類或は製造額に於ては、遙に全國の夫れに及ばざるは正に然らざるを得ざる所なり。今試に本市に於ける綿織物の古來より著名なるものを擧ぐれば、佐々緋、岡木綿、寛大寺綿、結城綿、佐織綿(國産綿)、及び近年の發達に係る廣幅綿布等にして、左に現歐洲戰亂以前に於ける其の發達の梗概を示さん。

佐々緋は其の起源古く、寛政年中の發明に係り、明治初年より販路大に擴張し、同業者續出し、爾來益々其の産額を増加せり。寛大寺綿は綿木綿の一種にして、天明年間京都寛大寺地方の職工美濃に來り、始めて之を織出し、後ち尾張に於ても亦之を試むるに至れり。結城綿は文政の頃栗栗郡の一機業者の發明に係り、爾後漸次製織家増加せり。佐織綿は延享年間海東郡に起りしも其の産額大ならず、明治に至り紡績業の盛なるに伴ひ漸く盛況に向ひ、爾來迂紆曲折を経て、一旦失墜せし信用を恢復し、需要の増進に伴ひ遂に國産綿の名を博し、次て今日の盛を致せり。岡木綿は眞岡木綿の高價にして、普く需要を充たす能はざるより、明治十九年始めて之を試織せしが、需要漸次増加し、爾來其の機業家は本市を始め郡部各地に於て盛に競争せしかば、組合を設けて製造の検査を勵行し、粗製濫造の弊を一掃せしかば、世の信用を博し、明治三十八年頃に至り著しき發展を爲し、爾後年と共に益々其の製造額を増加するに至れり。

廣幅綿布は其の起源最も新しく、而かも産額の大きなるものに屬せり。即ち明治二十七年三重紡績株式會社愛知分工場内に織布工場を設けて、天竺、粗布、金巾、綾木綿、綿フランネル生地等を製織し、輸入を防ぎ輸出を奨励せんとせしを嚆矢とす。爾來益々事業を擴張し、販路を開拓し、外は滿洲、朝鮮及び其他に及び、内は東京、大阪、静岡其他全國樞要の地方に伸び、明治三十八年には熱田西町に名古屋織布株式會社設立され、主として滿洲及び臺灣向綿布を製出し、日露戰役後に於て産額頗る増加し、爾後個人經營の工場續出し、以て今次の歐洲戰亂に逢著するに至り、製品の種類も増加し、ガーゼ生地、寧波布、ポプリン、紋織等の製出盛となり、現下の盛大を呈するに至れり。

第三節 開戦後に於ける状況

顧るに本邦に於ける各種産業が、現歐洲大戰の勃發後一時非常なる打撃を蒙りたるも、爾後世界に於ける戰時經濟の推移及び其の變調は、之を本邦斯界へ及ぼしたるの結果、前日の形勢を一變して、顯著なる活躍あるに至りたるも、本市若くは本縣綿織物界も亦開戦後一時其の餘波を蒙りて、不振の形勢を示し、大正四年に至るも、依然として一般に活氣を帯ぶるに至らず、唯一華客たる支那に於ける政變、銀塊相場の暴落等は戦前に於ける悪材料と稱せられ、輸出の不振を來たさしめしと雖も、其の綿織物製造額は、開戦後より上記大正四年に比し、遙に多額なりしより見れば、開戦後に於ける斯界に對する現戰亂の影響を觀察するに難からず。然るに翌大正五年に至りては、外は海外に於ける事情の變異、内は内地に於ける一般商工業界に於ける形勢に基き、前日の形勢を一變し、以て俄然として活躍するに至り、尋で大

織色木綿	(長)	八、八三、九〇	七、六九、七五	八、六四、八六	七、六三、六九	七、六三、七九	六、八〇、七九	六、九〇、五二	六、四三、五二
綿フランネル	(長)	三、〇五、八六	二、六八、四九	三、一〇、一四	二、五九、二五	三、七五、二八	一、七〇、九六	(節) 二、五、二六	三、一五、一〇
タオ	(長)	四、一六、六八	三、八〇、二二	五、二七、二二	四、〇三、九五	四、〇九、四六	三、三三、六一	四、五〇、八四	四、三三、八八
蚊帳	(長)	二、一三、三七	六、四四、〇三	二、二七、七九	五、二、七二	二、〇四、三〇	三、五九、九六	二、〇九、七五	六、〇九、〇六
袴地	(長)	四、五〇、〇〇	五、九八、九五	四、〇、七八	五、八、六一	三、六、七四	三、九六、〇七	—	—
男帶地	(長)	三、四四、八〇	三、五、三二	二、七、七九	一、五、六五	二、八、二九	一、九、〇三	—	—
女帶地	(長)	六、三三、八九	四、九、六六	九、七、九二	三、三、三三	八、〇、四九	一、〇、〇一	—	—
其他	(長)	一、四、三七、三三	二、〇、九三、一三	七、五九、一三	一、七、〇九、七三	三、五、二、五七	三、九三、五三	六、〇、〇六	一、六、七、〇七
合計		一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四	一、五、三七、六四

製産狀況此の如く増進せるより見れば、其の事業の規模は逐年擴張して、益々其の大を爲しつつあるは想像するに難からざるべし。蓋し一般織物界に於ける機業戸數、機數、職工數等の逐年増加しつつあるは、明かに統計の示す所なるを以て、一般織物界に重要な位置を占むる綿布又は一般綿織物業が、其の事業の規模、若くば製造經營の年と共に擴張するは、素と之れ自然の數なればなり。

第二節 織布會社發達の趨勢

前節一般綿織物の製産數量は、個人經營をも含有せるを以て、更に綿布のみの製出を經營せる會社企業に就て攻究する所あらん。之れ綿織物の大部分は綿布に屬し、本調査の目的も亦之に存するを以てなり。

第一項 事業の規模

本邦に於ける機械製廣幅綿布の製出は、主として綿絲紡績會社の兼營に係り、織布のみを専門とせる會社は少數なりとす。今明治四十五年—大正元年に於ける織布兼營紡績會社及び其の専門會社を表示せば左の如し。

大阪紡績株式會社	大阪合同紡績株式會社	天滿織物株式會社	内外綿株式會社(紡績工場)
尼崎紡績株式會社	大阪織物株式會社	三重紡績株式會社	堺紡績株式會社
富士瓦斯紡績株式會社	東京キヤリヨ製織株式會社	東京紡績株式會社	日本製布株式會社
鐘淵紡績株式會社	和歌山紡績株式會社	紀陽織布株式會社	

即ち十五社にして同上半期に於ける總紡績會社數三十二社、同下半期に於ける四十一社に對し、實に半數以下に過ぎず。大正二年に於ては合資會社大和田紡績所の増加に因りて十六社となるも、一方總紡績會社數は四十四社に増加せり。大正三年に於ては大阪紡績株式會社の東洋紡績株式會社に合併せられたる結果減じて十五社となり、大正四年には日本製布株式會社の内海紡績株式會社と變じたるも、元より社數に影響なく、然れど東京紡績株式會社の尼崎紡績株式會社に合併されたる爲め一社を減じたりと雖も、新に攝津紡績株式會社が斯業の兼營を開始し、又合名會社辻紡績所の起りたるより、結局一社を増加して十六社となるに對し、總紡績會社數は二社を減じ、同年末に於て四十二社となれり。大正五年に於ては、合資會社大和田紡績所の合資會社松岡紡績所と變じ、新に岸和田紡績株式會社の兼營を開始せるを以て、十七社に増加せしも、總紡績會社數は更に一社を減じて同年末には四十社となれり。大正六年上半期に於て

は、新に福島紡績株式會社の兼營を開始せしも、堺紡績株式會社の休止に因りて結局増減を見ずして、前年未同様十七社を算せしに對し、總紡績會社數は前年末に比し更に一社を減じて三十九社となれり。即ち大正六年上半期末に於ける織布兼營の紡績會社及び其の專問會社を列記せば左の如し。

攝津紡績株式會社	大阪合同紡績株式會社	福島紡績株式會社	天滿織物株式會社
内外綿株式會社(紡績工場)	合資會社 松岡紡績所	大阪織物株式會社	岸和田紡績株式會社
和歌山紡績株式會社	紀陽織布株式會社	内海紡績株式會社	合名會社 辻紡績所
尼崎紡績株式會社	東洋紡績株式會社	鐘淵紡績株式會社	富士瓦斯紡績株式會社
東京キヤリコ製織株式會社			

織布製造を兼營とし、若くは專問とする會社數の増減は叙上の如くなるが、更に進んで是等會社の工場數、及び織機臺數を、會社數と共に表示せば左の如し。

事項	明治四十五年		大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年
	上 半 期	下 半 期					
會社數	一五	一五	一六	一六	一五	一七	一七
工場數	一五	一五	一六	一六	一五	一七	一七
織機臺數	二〇、九〇二	二〇、八九八	二二、七八三	二五、三二五	二八、三八七	三〇、五六二	三三、〇四〇

即ち會社數の増加に伴ひ、工場及び織機臺數も亦隨て増加し、而かも此等二者は開戦後に於ける増加著

しく、戦前の大正二年を以て大正六年上半期と比せんか、工場數は二割六分弱、織機臺數は三割九分弱の各増加を呈せるは刮目に値す。

第二項 製造經營の狀況

織布製造規模は前項叙説の如く年と共に擴大し、殊に開戦以後を以て著しとするの結果、其の製造經營に於ても亦同様の步調を保ち、最近數年に於て著しく發展するに至れり。即ち織機運轉臺數に於て、大正六年上半期に於ては、明治四十五年—大正元年に比し五割七分強、大正三年に比し二割九分強の増加を來たせるを以て、其の製布出來高に於ても亦同勢を保ち、大正六年上半期は、明治四十五年—大正元年及び大正三年の各同期に比し、夫々七割一分強及び二割九分弱の増加を示し、更に大正五年の數字に據れば、明治四十五年—大正元年に比し六割三分強、大正三年に比し八分強の各増加に當れり。隨て一日平均出來高は勿論、原絲需要高に於ても夫々叙上製布高に準ずる増加を來たして逐年發展し、更に大正六年上半期に於ては、明治四十五年及び大正三年の各同期に比し、夫々約五割及び約二割の増加を呈せり。今叙上の諸事項及び其の附帶各事項に對する、明治四十五年以降各年に於ける増加の趨勢を示せば、實に左表の如くにして、其の顯著なるを觀るべし。

事項	明治四十五年		大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年
	上 半 期	下 半 期					
運轉臺數	一九、七六	一九、六五	二二、九一〇	二六、九五四	二九、九六二	三二、二五八	三三、二〇二

上編 第二章 第二節 織布會社發達の趨勢 第二項 製造經營の狀況

營業日數	計		就業時間	計		製布出來高	計		一臺一日平均出來高	計		原絲需要高	計		層絲出來高	計		職工數	計		職工賃金	計	
	上	下		上	下		上	下		上	下		上	下		上	下		上	下		上	下
計	15,800	15,800	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300
上	15,800	15,800	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300
下	15,800	15,800	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300

蓋し斯の如く製布出來高の激増したるは、工場數及び織機臺數の増加に伴ふ自然的の現象なるは勿論なりと雖も、開戦後に於て特に著大なるに至りし所以のものは、之れ職として現戦亂の結果、歐洲品の支那、南洋及び其他へ對する供給の激減したるに外ならずして、本邦織布業の益々隆盛を呈するに至りたるは、一般本邦產業界上寔に嘉すべきの現象なるを以て、斯の如き機會を逸せず、今後益々海外に於ける販路の擴張を圖らば、斯業の發展更に著しきに至るべきは毫も疑を要せず。

第三項 製品の種類

製布は其の種類頗る多數に上り、一々之を舉示するの煩に堪へずと雖も、今其の種類を概示せば、天竺布、粗布、薄地及び厚地の粗布、金巾、綾木綿、綿ネル、厚織木綿、小倉、キャリコ、綿縮、敷布地、小幅白木綿、大尺布、端尺、及び雑布等にして、是等は何れも我が紡績會社の兼營織布工場、或は専門織布會社の製造する所に係れり。而して叙上の内金巾及び綾木綿は、更に數種に細別するを得べし。其の他薄木綿、真岡木綿、茶木綿、尺一巾、浴巾、粉袋地等あれども、是等は主として一般個人經營、又は小規模の會社企業に據る工場に於て製出さるるものにして、紡績會社に於ては製出なきが如し。今是等各品の製造數量を表示せば左表の如し。

種別	明治四十五年 大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半年
天竺布	二四、元八、六六	二五、四二、七九	二五、五九、三三	二五、六〇、九〇	二四、五八、七三	二一、〇四、二二
粗地粗布	一五、〇六、七七	一三、〇〇、九四〇	一四、五七、四七五	一五、三〇、五六八	一四、五三、七六六	七、九八、八〇五
薄地粗布	三三、七〇	七八、〇〇五	—	—	—	—
厚地粗布	—	—	三、三六、〇七	—	—	—
金市	—	—	—	—	—	—
並地	—	—	—	—	—	—
厚地	—	—	—	—	—	—
薄地	—	—	—	—	—	—
綾木綿	—	—	—	—	—	—
片綾	—	—	—	—	—	—
雲齋	—	—	—	—	—	—
鼠雲齋	—	—	—	—	—	—
葛城織	—	—	—	—	—	—
薄織	—	—	—	—	—	—
綿ネル	—	—	—	—	—	—
ネル生地	—	—	—	—	—	—
厚織	—	—	—	—	—	—
小織	—	—	—	—	—	—

即ち製造數量の最多數なるは粗布にして、綾木綿之れに亞ぎ、以下二幅、三幅及び並幅の各金巾、天竺布、キヤリコ、小幅白木綿、綿ネル、綿縮、厚織木綿等を主とし、其他は製造數量大ならず。總じて開戦後何れも製品數量を増加せるが中にも、大正四年及び同五年の各年に就て觀る時は、大正五年に於て前年より減少したるものあるに注意すべきを要す。例へば粗布、片綾、葛城織、薄織、厚織木綿、小倉、綿縮、小幅白木綿等に於けるが如し。蓋し斯の如きは他に原因あらんも、主として市場の狀況如何に基因するが如し。

第三章 綿布及び綿製品の對外需給

第一節 綿布及び綿製品の輸移出概観

本邦製綿布及び綿製品の海外輸移出は、逐年増加發展し、明治四十五年—大正元年に於ては參千九百五

種別	明治四十五年 大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半年
キヤリコ	一三、八一、三六八	一四、八三、六六六	一〇、二九、四五五	二〇、三〇、八〇〇	一四、三三、八七七	二二、六四、四九二
綿縮	六、一五、九七八	八、三三、五一	一〇、〇五、三〇〇	一八、二二、二二三	一七、六〇、八四四	八、三三、三九九
數布	二、八九〇	四、七三三	四、九一一	四、七〇〇	七、七三二	—
小幅白木綿	二、五五、六六〇	一四、〇八、一一〇	一五、一〇、四〇三	二七、九七、九二八	二〇、七八、三〇〇	三、五〇、八八八
大尺布	—	六、三九、七七八	一〇、七六、四八八	—	—	—
端尺布	—	四、九三二	一、九四、四一〇	—	—	—
雜布	二、二〇九	一、七三六	五、四七〇	五、四八、六二四	三七	四〇〇
合計	三三、五四、六六四	四六、七五、五七七	四五、四九、〇一六	五〇、三〇、六三三	五六、〇一、〇〇八	二九、〇五、三五三

拾五萬八千餘圓を算するに過ぎざりしも、開戦當年の大正三年に於ては五千五百七拾四萬四千餘圓に増加し、更に大正五年に至つては壹億千七拾四萬參千餘圓に激増するに至れり。即ち大正五年に於ける増加率は、明治四十五年—大正元年に比し十八割強、大正三年に比し九割九分強に當り、更に大正六年上半期に至ては七千參百七拾九萬四千餘圓に達せるより見れば、大正六年全一ヶ年に於ては一段の増加を來すべし。蓋し斯の如き激増を呈せし所以のものは、主として現戦亂の影響に外ならざるを以て、其の海外輸移出地も亦隨つて増加擴張したるは自然の勢にして、戦前大正二年に於ては支那、關東洲、香港、英領及び蘭領印度、亞細亞露西亞、比律賓諸島、暹羅、英吉利、獨逸、北米合衆國、濠太利、布哇、朝鮮等なりしが、最近に於ては敵國たるの結果獨逸を減せしも、他面佛領印度支那、新西蘭土等を新に加ふるに至れり。今明治四十五年—大正元年以降最近に至る是等諸國へ輸移出せし綿布及び綿製品を、價額を以て示せば左の如し。

年次	輸 出		移 出		合 計	
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期
明治四十五年	三、三〇四、〇三	二、五〇七、七〇	四、四四三、〇〇	六、八六六、六五	一、一四三、三三	三、三三九、三三
大正元年	二、五〇七、七〇	二、八二四、七九	四、四四三、〇〇	六、八六六、六五	一、一四三、三三	三、三三九、三三
大正二年	一、七五五、〇七	一、九七六、六六	三、四四一、六九	六、一四三、九一	一、〇一五、二〇	二、五九一、七九
大正三年	二、四二七、七四	三、五〇〇、〇〇	四、八七二、七四	六、八七二、七四	一、四四五、〇〇	二、七五七、七四
大正四年	三、五三三、三三	三、七四五、九七	五、二八九、三〇	六、九三三、二七	一、六四三、九七	三、三三三、二七
大正五年	四、四三三、五五	五、六六六、五五	六、〇〇〇、一〇	九、〇〇〇、一〇	一、〇〇〇、一〇	二、〇〇〇、一〇
大正六年	六、七四四、七三	七、〇〇〇、〇〇	七、〇〇〇、〇〇	七、〇〇〇、〇〇	七、〇〇〇、〇〇	七、〇〇〇、〇〇

即ち海外輸出は最近五ヶ年に於ては三倍四割(即ち二倍四割の増加)以上に激増せしにも係はらず、朝鮮移出は僅に一倍二割(即ち二割の増加)に達せしに過ぎず、以て海外輸出の如何に旺盛を呈せしかを察すべし。

第二節 綿布及び綿製品の輸出

第一項 綿 布

前節綿布及び綿製品の海外輸移出は、前表の如く輸出を主とし、而して輸出に於ては綿布其の大部分を占め、綿製品は僅少なるは敢て贅するまでもなし。即ち明治四十五年—大正元年以降に於ける各種綿布の輸出状態を観るに、開戦當年なる大正三年に於て、多少減退を示せしものなきにあらずと雖も、大體上逐年増加し、殊に開戦後を以て著しとす。而して是等輸出増加せる各種綿布の内、其の主要なるものは、白木綿、色木綿、綾木綿、綿縮、綿フランネル、生金巾及び生シーチング、晒金巾及び晒シーチング、緋金巾、天竺布等にして、其の他綿木綿及び綿帆布の輸出も亦開戦後増加を呈せり。小倉織は大正三年以後輸出を見るに至りしが、大正六年上半期に至つて著しく増加し、更紗は大正五年まで輸出を見ざりしが、大正六年上半期に於て一躍貳百六拾八萬參千餘圓の輸出を示せり。今明治四十五年—大正元年以降最近に至る各種綿布の連年的海外輸出數量、及び價額を表示せば左の如し。

品 種	事項 單位	明治四十五年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年上半期	
		數量 (疋)	價額 (圓)	數量 (疋)	價額 (圓)	數量 (疋)	價額 (圓)	數量 (疋)	價額 (圓)	數量 (疋)	價額 (圓)	數量 (疋)	價額 (圓)
白 木 綿		一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九
白 木 綿		一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九	一、一五三、三三	七、八六六、七九

色木綿	綿木	綿木	綾木	手拭	瓦斯絲	小倉織	被褥	蚊帳	綿織
數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)
價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)
三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四	三、九三、七四

綿フ	生金巾及生シーチン	晒金巾及び晒シーチン	緋金巾	更紗	天竺	綿帆	其他綿織物	合計
數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)	數量 (疋)
價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)	價額 (円)
八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五	八、七四、一五五

叙上各種綿布の海外輸出總價額に對する輸出先の分布状態を觀るに、支那、關東洲、英領印度、蘭領印度等を主とし、是等諸國に對する輸出價額は、總輸出價額に對し三分の一以上を占めり。今便宜上叙上海

外輸出價額へ朝鮮移出價額を加へ、其の總價額に對する各國輸出價額の割合を觀るに、戰前大正二年に於ては支那の約八割を最とし、朝鮮の二割五分に亞ぎ、關東洲は一割六分を以て第三位を占め、英領印度は僅に二分七厘を算するに過ぎずして、其他の各國は之れ以下に止まれり。大正三年に於ては支那は六割、朝鮮一割九分七厘、關東洲七分六厘を算し、何れも前年より減少せしに反し、英領印度は四分に増加せり。開戦後の大正四年に於ては、支那及び關東洲は更に減少し、前者は五割七分、後者は六分六厘を算し、朝鮮は前年と大差なき一割九分六厘を占め、英領印度は更に増加して七分七厘に上り、香港は約二分を以て之に亞げり。大正五年に於ては支那は前年及び前々年よりも増加して七割六分に上りしに反し、朝鮮及び關東洲は更に減じて、前者は一割八分弱、後者は五分四厘に下れり。英領印度は前年に比し著しく増加して、殆んど一倍に達する一割四分七厘に進み、蘭領印度は三分を示して關東洲に亞げり。大正六年上半期に於ては支那は前年より減じ、前々年と大差なき五割八分強に下り、朝鮮及び英領印度亦減じて、前者は一割一分強、後者は一割二分弱を算せり。然るに關東洲及び蘭領印度は各増進して、前者は六分六厘、後者は四分三厘を示し、之に亞げるは北米合衆國の一分四厘なるを以て、其他の諸國は何れも之れ以下を占むるに過ぎず。斯の如く支那及び關東洲に對する輸出、及び朝鮮に對する移出の割合が、開戦後大體に於て減少しつつあるは、蓋し現戰亂の影響を蒙り、是等諸國以外に於ける輸出の發展を來たせるに外ならざるべし。

第二項 綿製品

綿製品は其の種類少なからずと雖も、綿布と類似的關係を有する重要なものに就て觀察せんに、是等の輸出は一般綿布の輸出旺盛に伴ひ増加するに至れるは、蓋し自然の數なりと稱すべし。然れど其の總價額に於ては、開戦後の大正四年は、戰前の大正二年に及ばずして、大正五年以降に於て著しく増加を呈するに至れり。而して是等各種の綿製品中、其の輸出價額の最大なるは綿製浴巾にして、其の主要輸出先は支那、香港、英領印度、及び濠太利等とす。今左に主要綿製品の明治四十五年—大正元年以降、最近に至る連年的の輸出數量及び價額を表示せん。

品種	事項	單位	明治四十五年—大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半期
綿製手巾	數量	(打)	七五、六四三	一〇一、三三三	九八、六四四	二九八、〇四四	一、二六、六六〇	五七、五三四
	價額	(円)	五、〇一〇	五、〇、五三二	四、一四四	一五、八六一	五八、一八〇	三、八〇一九
綿製浴巾	數量	(打)	三、三〇、六五五	三、〇一、一〇八	二、七四、三三七	二、六二、〇四四	三、三六、〇〇五	一、八七、一八六
	價額	(円)	三、六〇、五八一	三、六四、一五八	三、三三、四六一	三、〇四、二九八	三、三六、四九九	一、八三、〇三三
綿アラン	數量	(打)	二、八八、六八六	三、五四、〇九四	四、〇四、九〇五	七五五、六六七	二、五〇、八二六	一、六九、三三三
	價額	(円)	一七、一六四	二二、八八八	二九、二六四	四八、五三三	一、四四、一六四	一、〇六、〇六六
ケット	數量	(打)	—	—	—	—	—	—
	價額	(円)	—	—	—	—	—	—
合計	價額	(円)	二、三、五、三五	二、九、五、九六	三、五、二、八二	三、六、五、九三	五、二、八、九三	三、三、六、〇八

綿製品中の主要なるものには、尙ほ肌衣、綿メリヤス製品ありと雖も、綿布とは自ら其の趣を異にし、且つ本品に關する調査は既に發表したるを以て、本篇に於ては之を除外せり。

第三節 綿布及び綿製品の輸移入概観

本邦に於ける綿織物業の進歩發展は最近顯著なる發達を遂ぐるに至れる結果、其の海外輸移出は實に旺盛を極むること既記の如しと雖も、他面本邦に於ける製造なきか、若くは其他の特殊の關係に因り、海外よりの輸出も亦尠からず。然れど本邦に於ける綿織物業の發展に伴ひ、海外よりの輸入は逐年減少し、大正五年の如きは戦前大正二年に比し半額にも達せざるのみならず、之を輸出の大なるに比せば、素より同日の論にあらずして、試に輸移出價額に比すれば、戦前なる大正二年に於ては僅に二割三分強、開戦當年なる大正三年に於ては一割強、開戦後の大正五年に於ては僅に四分強に過ぎず。左に明治四十五年—大正元年以降最近に至る各年の輸移出數額を表示せん。

年次	輸 入		移 入		合 計	
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期
明治四十五年—大正元年	三、七五〇、一四〇	六、六八八、四〇〇	—	—	三、七五〇、一四〇	六、六八八、四〇〇
大正二年	六、〇六六、二〇三	四、六七〇、九九九	—	—	六、〇六六、二〇三	四、六七〇、九九九
大正三年	三、二四二、四三三	二、六六一、三五五	—	—	三、二四二、四三三	二、六六一、三五五
大正四年	二、〇四四、七五五	三、〇六二、八五一	—	—	二、〇四四、七五五	三、〇六二、八五一
大正五年	三、〇三三、〇〇元	二、七五五、五五一	—	—	三、〇三三、〇〇元	二、七五五、五五一
大正六年	—	—	—	—	—	—

即ち移入は大正元年下半期に於て、少許之れありたるのみにして、其他の各年に於て更に之を見ざるは、蓋し朝鮮に於ける斯業幼稚にして、同國に對しては、内地よりの供給に係れるに基因するは、言ふまでもなからん。

第四節 綿布及び綿製品の輸入

第一項 綿 布

綿布及び綿製品の最近數年に於ける海外よりの輸入は、前節表示の如く逐年激減し、而して綿製品の海外輸入は實に僅少に止まるを以て、叙上の趨勢は大觀上綿布の海外輸入上に於ける状態と見るを得べし。今戦前大正二年に於ける綿布の海外輸入價額を見るに實に千參拾四萬七千餘圓に達せしも、開戦後の大正四年に於ては激減して四百九拾參萬八千餘圓、同五年に於ては更に減じて四百參拾八萬九千餘圓を算するに過ぎず。即ち明治四十五年—大正元年以降最近に至る各種綿布の、連年的輸入數量及び價額を表示せば左の如し。

品 種	事項	單位	明治四十五年—大正元年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年	
			數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
綿織物及びブラツ シユ類	數量	(方碼)	三、〇〇五、七七一	三、〇九一、七九九	一、〇七三、三五四	一、二七〇、八三三	一、一七〇、八三三	五七〇、八六〇	四〇六、八八八	一、五、五五四	二、七七一	—	—	—
			價額	一、二二三、一五九	一、八八八、八三三	六六、五五四	二九、五二五	四三、七五五	一五、五五四	六、三三三	—	—	—	—
綿フランネル類	數量	(方碼)	三〇三、二二天	四〇六、三三二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			價額	九、七九九	一六、七五〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—
絹織物縮等	數量	(方碼)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			價額	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
金巾及シ	數量	(方碼)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			價額	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1チング	數量	(方碼)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			價額	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第二項 綿製品

海外輸入の綿製品中主要なるものは綿製手巾、肌衣綿メリヤス製品、及び其他等なりと雖も、肌衣綿メリヤスは既記の趣旨に基きて之を除外し、單に綿製手巾に就て觀るに、最近の輸入状況左表の如し。

事項	單位	明治四十五年—大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半期
數量	(疋)	三〇、六七	一四、八三	一〇、一八三	一〇、三九四	一六、二四七	...
價額	(円)	三、四六〇	一、六四二	一、三二四	一〇、一四四	一七、七〇一	...

即ち綿製手巾の輸入は、輸入綿布に比し寔に僅少なる數額に止まり、開戦後の輸入減少は正に綿布と同勢を保ち、大正五年の如きは明治四十五年—大正元年に比し殆んど半減せるの狀態なりとす、以て一般綿製品の輸入状況を察するに足るべし。

第四章 原絲の需給

第一節 供給

本邦綿織物用原絲は、本邦綿絲紡績の尙ほ未だ發達著しからざりし時代に於ては、内地製産綿絲のみにては需要を充たす能はざりしを以て、海外よりの輸入著しかりしと雖も、爾後本邦綿絲紡績業の異數なる發展に伴ひ、漸次海外よりの輸入を防歴し、今や殆んど之を自給し得るに至りたるのみならず、進んで海外諸國に對し盛に輸出するに至れり。今最近數ヶ年に於ける本邦綿絲製造高及び、海外よりの輸入高とを

概示し、總供給高を觀るに左表の如し。

年次	本邦製造高	海外輸入高	合計
明治四十五年—大正元年	一、三五二、二〇九 ^圓 ・五	一、八九五	一、三五四、一〇三 ^圓 ・五
大正二年	一、五一七、九二八 ^圓 ・〇	一、二六六	一、五一九、二四八 ^圓 ・〇
大正三年	一、六六六、一八一 ^圓 ・〇	六〇三	一、六六六、七八八 ^圓 ・〇
大正四年	一、七二〇、二六四 ^圓 ・五	五八八	一、七二〇、八五二 ^圓 ・五
大正五年	一、九二七、五七九 ^圓 ・〇	六六〇	一、九二六、二三九 ^圓 ・〇
大正六年上半期	九六六、一九六 ^圓 ・五	二五六	九六七、一五二 ^圓 ・五

即ち本邦綿絲製造高は逐年増加せるに反し、海外輸入高は之に反し年々減少し、殊に現戰亂勃發以後に於て著しとす、之れ蓋し戰亂影響に伴ふ内外よりの需要旺盛を呈したるに外ならず。斯くして本邦に於ける綿絲供給高は、年と共に増加し、大正五年を以て明治四十五年—大正元年に比較せんか、實に四割強の増加に當れり、以て本邦綿絲紡績業發展の狀態を想見するに足らん。

而して是等内地製造綿絲の種類如何を見るに、主として太絲にして、細絲は寔に僅少なりとす。故に海外より輸入の細絲を防歴し、能く之を自給せんと欲せば、須らく細絲製造を奨励せざるべからず。今試に最近五ヶ年間に於ける製品種類の變遷狀態を觀るに、實に左表の如きものあり。

番	手	品種	明治四十五年—大正元年	大正五年	比較増、減(△)
右	撚		五九九、七五五 ^圓 ・〇	七〇七、〇六五 ^圓 ・五	一〇七、三一〇 ^圓 ・五
左	撚		一二五、一七〇 ^圓 ・五	二二九、〇九七 ^圓 ・五	一〇三、九二七 ^圓 ・〇

番	計	六十手以上		六十手以下		三十手以下		計	計
		左	右	左	右	左	右		
十六手以下	計	瓦	擦	瓦	擦	瓦	擦	計	計
		斯	絲	斯	絲	斯	絲		
		絲	擦	絲	擦	絲	擦		
		計	計	計	計	計	計		
合	計	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、九二五、五七九・〇	一、九二五、五七九・〇	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五
外	計	一、六一三・五	一、六一三・五	一、七四六・〇	一、七四六・〇	一、六一三・五	一、六一三・五	一、六一三・五	一、六一三・五
六十手以上	計	一、三、九七八・〇	一、三、九七八・〇	一、五、〇三二・五	一、五、〇三二・五	一、三、九七八・〇	一、三、九七八・〇	一、三、九七八・〇	一、三、九七八・〇
六十手以下	計	一、四、一一四・〇	一、四、一一四・〇	一、六、〇七〇・五	一、六、〇七〇・五	一、四、一一四・〇	一、四、一一四・〇	一、四、一一四・〇	一、四、一一四・〇
三十手以下	計	二、〇七〇・〇	二、〇七〇・〇	二、八八四・〇	二、八八四・〇	二、〇七〇・〇	二、〇七〇・〇	二、〇七〇・〇	二、〇七〇・〇
計	計	四、四四一・〇	四、四四一・〇	五、二〇〇・〇	五、二〇〇・〇	四、四四一・〇	四、四四一・〇	四、四四一・〇	四、四四一・〇
計	計	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五	一、三、五二、二〇九・五

即ち漸次細絲製造量を増加するに至れるも、尙ほ十六手以下の太絲約半數に達せるを觀るべし。而して之を地方別に據りて見るに、東京方面に於ては細絲比較的多數を占むるも、大阪方面に於ては太絲の製造

大部分を占むるの状態なりとす、又以て地方別に據る製品種類の差異を想見すべし。

第一節 需 要

翻つて綿絲の需要を觀るに、逐年内外に於ける増進を來たし、殊に開戦後一段の増加を來たせり。即ち最近數年に於ける内外需要の狀況を表示せば、實に左の如し。

年	次	内地需要高	海外輸移出高
明治四十五年—大正元年		九七九、一七一・五	三七四、九三三
大正二年		一、〇五〇、五一二・〇	四六八、七三六
大正三年		一、〇九六、七九八・〇	五六九、九九〇
大正四年		一、一四四、九六一・五	五七五、八九一
大正五年		一、三七九、〇九二・〇	五四七、一四七
大正六年上半年期		七〇五、六九一・五	二六一、四六一

即ち最近大正五年に於ける内地需要高は、之を明治四十五年—大正元年に比し四割一分弱、大正三年に比し四分強の増加を呈せるを觀るべし。蓋し斯の如く内地需要の激増したる所以は、本邦綿織物業の旺盛を反證するものにして、之れ職として現戦亂の好影響に因り、海外より本邦に對する綿織物業の熾盛なるに胚胎せるものにして、之と同時に内地に於ける需要も亦増進したるに外ならず。

中編 時局と名古屋市綿織物業

第五章 名古屋市綿織物業の地位

第一節 愛知縣織物業に於ける綿織物

我が愛知縣及び名古屋市は、織物を以て産業界に於ける重鎮とし、其の製造工場或は製産額は、各種製産業に冠絶せるを以て、斯業の廣汎なること、實に本業の右に出づるものなきと共に、綿織物は本縣織物業を左右し得る製造額を有し、實に其の主要織物なりとす。即ち綿織物の總織物に對する割合は、實に七八割の多きを占め、前途尙ほ優勢を呈せんとするは、左表を觀るも亦瞭かなり。

年次	總織物	綿織物	綿織物以外の諸織物
明治四十五年—大正元年	二九、五九九、四六七	二〇、七九三、〇五四	八、八〇六、四一三
大正二年	三二、〇八三、四三七	二一、一六五、三〇五	一〇、九一八、一三二
大正三年	三一、八〇二、三三一	二二、六五一、六二八	九、一五〇、七〇三
大正四年	二七、七六三、七九九	一八、二〇三、五一〇	九、五六〇、二八九
大正五年	四四、八三六、四四八	三〇、七一九、四九六	一四、一一六、九五二

本表に據る時は大正四年は大に製産額を減せしと雖も、翌大正五年に於ては著しく増加するに至りたるは、蓋し現戰亂の影響に因り開戰翌年に於て機業界の不振を來たしたるも、爾後東洋及び南洋方面に於て、印度其の他歐洲品供給の激減したるが爲め、大正五年に至りては此の結果を受けて、本邦機業界の旺盛を

招致したるに伴ひ、本縣に於ても亦之が餘勢を蒙りたるに外ならず。而して前表に於ける綿織物以外の諸織物とは、絹織物、絹綿交織物、綿毛布、毛織物及び其の交織物、麻織物及び其の交織物、並に其他の雜織物を含有せるものにして、是等織物の製産額は絹綿交織物主位を占めて、全價額の半額以上に達し、毛織物及び其の交織物之に亞ぎて、大體上絹綿交織物の半額に及び、以下絹織物、綿毛布の順位にあり。是等綿織物以外の諸織物の總價額は綿織物に對し、多くも五割二分弱(大正二年)、少なきは四割二分弱(大正三年)に過ぎずして、而かも綿織物の逐年的の増加發展は、絹織物以外諸織物の夫れ以上において、大體上現時に於ける綿織物は、正に總織物の三分の二以上を占むると雖も、今後更に一段の發展あるべきは自然の數なるべし。

第一節 名古屋市綿織物業の愛知縣綿織物業に於ける地位

愛知縣織物業に於ける綿織物の地位は、前節叙説の如くなるが、竊て名古屋市に於ける綿織物の狀況も亦、略ぼ同一の趨勢を有するを見る。即ち名古屋市に於ける綿織物製産額を、其の總織物價額に對比するに、多きは六割五分弱(大正二年)、少なきは四割八分強(大正元年)にして、其他の各年は大正三年に於ける五割七分弱を除ひては、他は六割一二分を占むるを以て、愛知縣に於ける割合より稍々下位を示し、其の差率丈け綿織物以外に於ける諸織物の發達を呈せるものにして、之れ即ち愛知縣に於ける是等諸織物の發達と差あるの點なりとす。然れども由來斯の如き製造業は、工場及び職工等の點に於て、郊外に於て市民の經營せるもの少なからざるを以て、是等を本市勢力圈内に含有せしむる時は、一層綿織物の旺盛を示せるを

観る、即ち郊外郡部に於ける綿織物總額の總織物價額に對する割合を観るに、多きは七割弱(大正元年)、少なきは四割二分強(大正二年)を示し、其他の各年は五割五分強乃至六割五分強を呈せり。今左に總織物に對する綿織物の消長を、名古屋市、郊外郡部、及其他の郡部の三區域に分別表示して、一見其の状態を甄別するの資に供せんとす。

年次	區域別	總織物	綿織物	綿織物以外の諸織物
明治四十五年 —大正元年	名古屋市	五、六三〇、五一八	二、七二三、二四三	二、九〇七、二七五
	郊外郡部	一、四二九、八二七	一、〇〇一、五四〇	四二八、二八七
	其他の郡部	二二、五三九、一二二	一七、〇六八、二七一	五、四七〇、八五一
大正二年	名古屋市	二九、五九九、四六七	二〇、七九三、〇五四	八、八〇六、四一三
	郊外郡部	六、一八二、九四八	四、〇一三、九八三	二、一六八、九六五
	其他の郡部	二、一五五、二五九	九一六、四二九	一、二三八、八三〇
大正三年	名古屋市	三三、七四五、二三〇	一六、二三四、八九三	一七、五二一、三三七
	郊外郡部	三二、〇八三、四三七	二一、一六五、三〇五	一〇、九一八、一三二
	其他の郡部	五、四七六、三四二	三、一〇四、四三四	二、三七一、九〇八
大正四年	名古屋市	二、七三九、二一四	一、六三六、六二一	一、一〇二、五九三
	郊外郡部	二二、五八六、七七五	一七、九一〇、五七三	五、六七六、二〇二
	其他の郡部	三二、八〇二、三三一	二二、六五一、六二八	九、一五〇、七〇三
大正五年	名古屋市	六、一一六、四二二	三、八〇二、六〇九	二、三一一、八一三
	郊外郡部	二、七四五、三七一	一、五一九、九七九	一、二三三、三九二
	其他の郡部	一八、九〇二、〇〇六	一二、八八〇、九二二	六、〇二一、〇八四
計	名古屋市	二七、七六三、七九九	一八、二〇三、五一〇	九、五六〇、二八九
	郊外郡部	九、八二二、六〇四	六、〇一〇、八〇〇	三、八一、八〇四
	其他の郡部	四、六九一、九九七	三、〇六三、〇五四	一、六二八、九四三

大正五年
名古屋市
郊外郡部
其他の郡部
計

九、八二二、六〇四
四、六九一、九九七
三〇、三二一、八四七
四四、八三六、四四八

六、〇一〇、八〇〇
三、〇六三、〇五四
二一、六四五、六四二
三〇、七一九、四九六

三、八一、八〇四
一、六二八、九四三
八、六七六、二〇五
一四、一一六、九五二

〔備考〕 郊外郡部は愛知及び西春日井の兩郡を總稱す、以下皆然り。

更に本表を案するに、名古屋市に於ける總織物價額は愛知縣總織物價額に對し多きは二割二分(大正四年)、少なきは一割七分強(大正三年)を示し、自餘は二割二分弱(大正五年)及び一割九分内外(大正元年、二年)に當り、又綿織物に於ける割合を求むるに、多きは二割一分弱(大正四年)、少なきは一割三分(大正元年)を示し、自餘は二割弱(大正五年)、一割九分(大正二年)及び一割四分弱(大正三年)なるより觀れば、名古屋市に於ける織物界は、縣下斯界に對し二割内外の勢力を占むるに過ぎずして、而も綿織物は一層其の勢力の小なるを悟得するに足らん。然れども郊外郡部に於ける斯業を包擁せしむるときは、稍々其の勢力を増大すべしと雖も、到底郡部に於ける斯業の大なるに如かず。然れども逐年發展を來たし、殊に開戦後に於ては一層の増進を示しつゝあるを以て、今後に於ける本市斯界は、縣下斯界に對し、益々優勢を占むるに至るべきか。

第三節 廣幅綿布の綿織物上に於ける地位

更に進んで機械織廣幅綿布の一般綿織物上に於ける製産状態を窺ふに、愛知縣全體に於ける製産價額は勿論、其他名古屋市、郊外郡部、或は其他の郡部は、程度の大小こそあれ、何れも本綿布以外に於ける綿織物の製産價額に及ばず。即ち縣全體としては一般綿織物總價額に對し、大正五年に於ける二割九分弱を最

とし、大正四年及び同二年の二割八分強之に亞ぎ、以下大正三年の二割一分強、及び大正元年の一割四分強とす。名古屋市に於ては大正五年の五割一分強最も優勢を示し、大正三年の四割二分之に亞ぎ、以下大正二年の三割七分強、大正四年の二割七分強、及び同元年の二割七分弱相順次せり。郊外郡部に於ては大正元年は僅に一割九分強に過ぎざるも、大正五年は五割三分弱を示し、其他大正二年の四割五分強、大正四年の四割、及び大正三年の三割等、大勢上三割以上を占むるより觀れば、本綿布は市内及び郊外郡部に於ける發達が、大體に於て遙に郡部を凌駕せるを知るを得ん。乞ふ左表に據りて叙上所説を、更に具體的に窺ふ所あるべし。

年次	區域別	機械織廣幅白綿布	其他	計
明治四十五年 大正元年	名古屋市	七二六、一九七	一、九九七、〇四六	二、七二三、二四三
	郊外郡部	一九四、四五八	八〇七、〇八二	一、〇〇一、五四〇
	其他の郡部	二、〇三九、二八五	一五、〇二八、九八六	一七、〇六八、二七一
大正二年	名古屋市	二、九五九、九四〇	一七、八三三、一一四	二〇、七九三、〇五四
	郊外郡部	一、四九三、六六二	二、五二〇、三二一	四、〇一三、九八三
	其他の郡部	四一六、〇〇二	五〇〇、四二七	九一六、四二九
大正三年	名古屋市	四、〇五〇、六二二	一一、一八四、二七一	一六、二三四、八九三
	郊外郡部	五、九六〇、二八六	一五、二〇五、〇一九	一一、一六五、三〇五
	其他の郡部	一、三〇二、五七九	一、八〇一、八五五	三、一〇四、四三四
大正四年	名古屋市	四、九四二、三三三	一、一四二、三三八	一、六三六、六二一
	郊外郡部	三、〇三三、七二二	一四、八七七、八五一	一七、九一〇、五七三
	其他の郡部	四、八二九、五三四	一七、八二二、〇九四	二二、六五一、六二八

年次	區域別	計
大正四年	名古屋市	一、〇三〇、六六三
	郊外郡部	六一九、八一
	其他の郡部	三、五一四、九九八
大正五年	名古屋市	三、〇八七、五九一
	郊外郡部	一、六四一、九六〇
	其他の郡部	四、〇三四、六八三

更に本表に據りて、名古屋市に於ける廣幅綿布製産状況の郡部に對する形勢を窺ふに、勿論郡部の優勢なるに如かざるも、逐年發展の跡を示し、殊に最近に至り郊外郡部を併算せんか、正に郡部を凌駕するを發見すべし。即ち明治四十五年—大正元年に於ける名古屋市の、郊外郡部以外に於ける其他郡部に對する形勢は、三割五分強を占むるに過ぎざりしに、大正二年に於ては三割七分強、大正三年に於ては四割四分弱に遞増し、大正四年に於ては二割九分強に下りしと雖も、翌大正五年に至ては實に七割六分強に激増し、更に郊外郡部を併算せば十一割七分強、即ち一割七分強の多きを示すに至れり。蓋し郡部に於て會社企業に據る本綿布の主産地は知多郡にして、東洋紡績株式會社知多工場は郡部に於ける唯一の大工場なりと雖も、退いて其の設備機械臺數を見るに、之を單に同社の市内工場なる愛知工場に比するも、僅に約三割に過ぎざるを以て、若し夫れ之に尙ほ市及び其の附近に於ける他工場の設備を併算せんか、一層其の割合を減するに至るべし。蓋し斯の如きは最近に於ける海外需要の旺盛に基因するに外ならずして、又以て本綿布の市内及び郊外の最近に於ける製造發展の形勢を察知するに足らん。

第四節 各種綿布の綿織物上に於ける地位
第一項 綿布一班及び其他の綿織物

名古屋市に製産する各種綿織物の種類は、其の數實に夥しと雖も、帶地類其他一二の物を除けば、他は殆んど綿布類にして、今是等綿織物總價額を愛知縣の夫れと對比するに、明治四十五年—大正元年に於ては一割三分強、大正二年に於ては一割九分弱、同三年に於ては一割四分弱、同四年に於ては二割一分弱、及び同五年に於ては一割九分強にして、漸次増加の趨勢を有し、且つ郊外郡部に於ては、明治四十五年—大正元年に於ける四分強より大正五年に於ける一割弱に増進せるを以て、所謂名古屋市及び其の勢力圏内に於ける綿織物は、益々縣下綿織物界に對し優勢を占めつゝあるを知らん。今左に各種綿織物の概別を掲げ、名古屋市及び郊外郡部、其他の郡部及び愛知縣全體に對する地位を瞭かにせん。

年次	品種	名古屋市		郊外郡部		其他の郡部		合計(愛知縣全體)	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正元年 明治四十五年	廣幅綿布	八、五二、九六六	七、六、一九七	一、二七、五〇三	一、九四、四四一	九、八八、九六〇	二、〇九、一三三	一、九六、九二八	二、九七、九四〇
	小幅綿布類	一、九八、六六六	一、五八四、二二五	七、七、〇〇元	五、五、四〇一	二、九、三三六	一、九、六九二	一、六、六〇七	一、四、七二二
	綿フランネル	三、〇〇七	一、四〇、一八八	一、七、四三三	二、八、九〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇
	タガール	八、七五五	一、〇、五五五	—	—	—	—	—	—
	帶地類	一〇、八〇九	三、六、一九八	一、六、四八八	三、七、八一	一、四、四二七	二、〇、九七七	一、九、六六六	二、七、五三三
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	

年次	品種	名古屋市		郊外郡部		其他の郡部		合計(愛知縣全體)	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正二年	廣幅綿布	一、五、九八、六三〇	一、四、五、六三二	六、九、九七七	四、六、〇〇三	二、八、六四八、八六〇	四、〇、〇三三	一、九六、九二八	二、九七、九四〇
	小幅綿布類	二、三、八、九〇一	二、〇、五、三三四	四、九、三三九	四、九、三三九	二、三、四、五〇〇	一、〇、〇〇〇	一、六、六〇七	一、四、七二二
	綿フランネル	三、四、九四五	一、三、九、七八〇	一〇、六六八	四、九、三三	七、三三〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇
	タガール	二、二、五〇〇	八、七五〇	—	—	—	—	—	—
	帶地類	二、四、四九〇	六、四、四七七	八、〇〇〇	六、六〇〇	四、三三〇	三、七三	一、三、二二四	二、七、五三三
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	
大正三年	廣幅綿布	一、四、七、八二一	一、三、〇、五九七	一、三、〇、五九七	四、九、三三九	二、三、四、五〇〇	一、〇、〇〇〇	一、六、六〇七	一、四、七二二
	小幅綿布類	二、一、〇、七、〇二一	一、六、〇、九二四	一、六、〇、九二四	四、九、三三九	二、三、四、五〇〇	一、〇、〇〇〇	一、六、六〇七	一、四、七二二
	綿フランネル	三、三、二二六	七、九、八四〇	九、九、八二九	二、四、八四〇	三、三、〇九	三、三、〇九	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇
	タガール	八、五七七	五、八七七	—	—	—	—	—	—
	帶地類	一、九、六六七	八、五、八八	三、三三	三、三三	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇	一、〇、〇〇〇
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	
大正四年	廣幅綿布	三、三、六、六二八	一、〇、〇、六三三	二、二、九、八〇〇	六、九、八二一	四、〇、八四二	三、五、四、九八	六、九、七三三	五、一、五、四三三
	小幅綿布類	一、一、五、五、四六	二、四、七、三三九	五、七、一、五五	五、三、四、〇六	三、三、五、三三	九、三、〇、〇〇	二、五、七、〇六	二、一、七、〇六
	綿フランネル	一、二、三、七、〇五	二、一、九、〇、二五	一、三、三、〇、二一	三、五、八、二七	二、四、九、九六	二、四、九、九六	二、五、七、〇六	二、一、七、〇六
	タガール	二、一、七、〇	八、二二四	—	—	—	—	—	—
	帶地類	四、九、〇、〇八	一、九、〇、三九	三、三、五、三	一、〇、四九	一、〇、四九	一、〇、四九	一、〇、四九	一、〇、四九
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	
大正五年	廣幅綿布	三、七、五、三、三三	三、〇、七、五八一	一、三、九、六、一〇〇	一、六、四、九〇六	三、四、六、七、一三	四、〇、三、四、六三	六、八、二、〇、八四	八、七、四、三、四〇
	小幅綿布類	一、五、四、三、〇〇	二、四、九、〇、〇四	一、〇、八、〇、七二	一、一、九、〇、九三	二、六、七、九、三〇	一、七、二、九、五七	三、三、四、九、七二	三、〇、七、七、四四
	綿フランネル	二、〇、三、六、九三	三、八、四、三二	七、九、八、七	二、七、八、七三	一、〇、〇、〇、〇〇	一、〇、〇、〇、〇〇	一、〇、〇、〇、〇〇	一、〇、〇、〇、〇〇
	タガール	一、七、五、四	二、二、八、六二	—	—	—	—	—	—
	帶地類	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	

帶地類(本)	合	計	三六
合	計	三六	三六
合	計	三六	三六

〔備考〕* 價額に對する總數量を現はさす。

更に本表を按ずるに名古屋市に於ける綿織物の製産額は、大正二年に於て前年に比し八分強の増加を示せるも、郊外及び其他の郡部に於ては却て前年より減少せるの結果、愛知縣全體としては、僅に二分弱の増加に過ぎずして、名古屋市の同年に於ける斯業の活況を察すべし。爾後大正三年及び同四年は大正二年より製産價額を減せしと雖も、大正五年に至ては著しく増進し、前年に比し五割八分強、大正三年に比し九割三分強、明治四十五年―大正元年に比しては實に十二割一分弱の激増を示せるに對し、郊外郡部及び愛知縣全體に於ける大正五年製産價額の、大正三年及び明治四十五年―大正元年に對する増進割合は、前者八割七分強及び二十割強、後者三割六分強及び四割七分強に當り、郊外郡部は市部と同じく激増を示せるも、縣全體としては遙に之に及ばざるを觀るべし。而して綿織物中に於ける綿布は、大體に於て市郊外及び其他の郡部は、何れも小幅綿布類大部分を占むると雖も、最近に至り市及び郊外郡部に於ては廣幅綿布の製産は、小幅綿布類の夫を凌駕するに至れり、以て其の變遷の狀を窺ふべし。

第二項 綿毛布

綿毛布は純然たる綿織物と稱する能はざるを以て、叙上諸表統計には之を含有せしめざるも、試に最近數年間に於ける製産額を表示せば左の如し。

年次	名古屋市		郊外郡部		其他の郡部		合計(愛知縣全體)	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
明治四十五年―大正元年	三八,五〇	三三,五八	—	—	三〇,〇〇	四四,〇〇	二八,五〇	二五,五八
大正二年	一八,六二	四八,六三	—	—	三〇,五七	四六,三〇	二七,四九	一九,五二
大正三年	六,七七	五,七九	—	—	一〇,〇〇	五,〇〇	九,七五	一〇,三九
大正四年	一〇,一三	二二,三五	—	—	—	—	一〇,一三	二二,三五
大正五年	三二,九三	五五,六九	五,〇〇	二,九〇	二四,九〇	一,二七	三三,〇〇	五八,六五

即ち綿毛布は主として名古屋市に於て製産し、郡部に於ける製産量は僅少なりとす。郊外郡部に於ては大正五年以前更に其の製産を出さざりしも、同年に至り西春日井郡に之を見るに至れり。其他の郡部は主として中島郡にして、他郡に於ては僅に渥美郡あるに過ぎずして、而かも最近數年に於ては、大正二年及び同五年に於てのみ之を出せしに過ぎず。市部に於ける製産狀況は戰亂の影響を蒙りて、大正三年は著しく不振なりしも、越えて大正五年に至ては、最近數年に於て嘗て其の比を見ざる激増を示せるは、蓋し時局の好影響を受け、一般織物界の活躍に伴ひ、本品の需要増進したるに基因せるに外ならず。

第五節 全國及び樞要地方との比較

第一項 全國綿織物との比較

前節叙説に據り我が名古屋市製産綿織物の、愛知縣に對する形勢を瞭にしたるを以て、更に進んで全國

との比較を求むるに、第二章第一節及び本章第二節並に前節所載の各表に據り、吾人は明治四十五年—大正元年に於て一分八厘弱、大正二年に於て二分四厘強、同三年及び同四年に於て何れも二分一厘弱に當れるより察するに、大正五年に於ては更に之れ以上の増進を示せるは、蓋し瞭かにして、大體上約三分に相當する製産額を有するものと觀るを得べし。名古屋市に於ける綿織物製産額は、一般本市織物上大部分を占め、随つて本市製産界重要な位置を占むると雖も、其の本邦綿織物界に對する位置は實に叙上の如くなるを以て、少なくとも本邦綿織物界に對し十分の一以上の勢力を扶植せんと欲せば、前途尙ほ一段の努力經營を要するものあるを悟得せん。

第二項 樞要地方に於ける綿織物との比較

然るに翻つて全國樞要綿織物製産地方との比較を求むるに、我が愛知縣は實に全國主産地の第一を占むる大阪府に亞ぎ、和歌山縣は本縣に亞ぎて第二位を占め、以下三重縣、岡山縣、兵庫縣及び東京府等相順次せり。乞ふ其の詳細は次表に據りて、之を窺へ。

地方別	大正二年		大正三年		大正四年	
	反物價額	總地合額	反物價額	總地合額	反物價額	總地合額
東京	九七三、三六	九七三、三六	六〇六、四〇	六〇六、三〇	三、七五、七六	五、八七、〇七
大阪	四九八、〇三	四九八、〇三	五四、八三、三〇	五四、八三、三〇	五七、〇〇、一三	五、七三、七二
兵庫	八七八、六四	八七八、六四	九、四四、九七	九、四四、九七	一〇、三三、〇三	一〇、三三、〇三
三重	一〇、〇九、〇三	一〇、〇九、〇三	一四、二五、九五	一四、二五、九五	九、八三、〇〇	一〇、一九、六〇
愛知	三、三三、二九	三、三三、二九	三、九七、四七	三、九七、四七	一六、三三、九五	一八、四三、三六
岡山	三、〇〇、〇七	三、〇〇、〇七	九、七〇、四七	九、六三、二九	五、一〇〇、七八	七、二七、三〇
和歌山	一四、六三、五九	一四、六三、五九	一六、四四、九〇	一六、四四、九〇	一六、八三、三六	一七、四六、〇六

〔備考〕 本表には綿毛布を含有す。

即ち我が愛知縣は大阪府に對し三割一分強乃至四割強に當り、和歌山縣に對し十割六分弱乃至十一割四分強を占め、更に東京府に對しては大體上三倍内外の盛況を呈するを知らん、織物の本縣主要物産の雄たる、茲に至り益々明白なると共に、名古屋市に於ける綿織物の本縣に對する形勢は、叙上の如くなるを以て、其の本邦に對する位置も自ら悟得するを得ん。

第三項 樞要地方に於ける廣幅綿布との比較

一般綿織物業の旺盛なる大阪府は、機械織廣幅綿布の製産額に於ても、亦全國に冠絶し、最近に於ける製産額は實に貳千參百萬圓以上に達せり。我が名古屋市に於ても亦本綿布の製造輓近發達するに至りたりと雖も、尙ほ未だ大阪府に亞ぐ製産額を出さずして、三重及び兵庫兩縣に比するも遜色あり。即ち最近の統計に徴するに、大阪府に對しては僅に三割内外の製産額を占むるに過ぎず。蓋し大阪地方は夙に紡績業の旺盛を來たし、其の兼營に係る本綿布の製造も亦盛大なるに基因するに外ならず。然れども他面岡山及び和歌山兩縣と比較すれば、本縣に於ける本綿布製産額は、該兩縣の上に位し、東京府に比しては、輓近二倍四五割の多きに達するに至れり。乞ふ其の詳細は左表に據りて窺ふべし。

中編 第五章 第五節 全國及び樞要地方との比較 第三項 樞要地方に於ける廣幅綿布との比較 四〇

地方別	大正二年		大正三年		大正四年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
東 京	三、三三、〇六一	三、四七、二三	二、五九、四〇七	二、三九、二六一	二、八九三、三五六	二、三六、六三三
大 阪	一、六三、三三九	二、九七、二五	二、八七、三二五	一、七五、九六一	一、八七、八七〇	三、四四、九六
兵 庫	六四、六四、六六	六、九三、七二
三 重 縣	七、六七、一三八	八、三三、八七	八、〇九、三六二	三、九八、七九	八三、四三、〇〇	七、五五、四〇
愛 知	一九、九九、二八	二、九五、四〇	四、〇六、七二七	五、九〇、二六	六、七五、三六六	五、一六、四三
岡 山	四〇、九三、六〇	四、〇八、三六	三、七九、九七	二、八三、八四	三、九〇、四五	四、一五、九六
和 歌 山	一五、九八、八〇	二、三〇、五〇	四〇、〇〇、一〇〇	三、〇〇、二四〇	三、〇〇、二四〇	四、〇三、二〇
名古屋	六一三	六一三	六二二	六二二	八六六	一、〇八〇

上表は愛知縣全體に於ける廣幅綿布製産額の、全國樞要主産地との比較なりと雖も、之に據りて名古屋市の是等地方に對する地位をも、略ぼ瞭然たらしむるの資たるを得ん。即ち名古屋市に於ける廣幅綿布の是等三ヶ年に於ける製産額は前既に表示せしが如く、大正二年に於ては千五百參十九萬八千餘碼、價額百四拾九萬參千餘圓、同三年に於ては千四百七十八萬參千餘碼、價額百參拾萬貳千餘圓、及び同四年に於ては千貳百六十萬六千餘碼、價額百參萬餘圓なるより、其の大勢を察知すべし。

更に我が名古屋市に於ける會社企業に據る織布事業の規模を、大阪及び東京兩方面に於ける夫れとを對照せんが爲め、是等三地方に於ける斯業使用の織機臺數を觀るに、左の如きものあり。

地方別	明治十五年	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半年
大 阪	八〇五〇	八、一七八	九、二八六	一〇、二六六	一〇、八〇九
東 京	二、三五七	二、五六一	二、五六二	二、五八四	二、五九〇

即ち會社企業に據る織布事業に於ける織機臺數は、本市最も少數にして、東京に對し三分の一にも足らざる所以のものは、蓋し本市若くは郊外に於ては個人經營の工場比較的多數を占め、會社企業のもの少數なるに外ならず。

本市に於ける會社企業に據る織布業經營の最大なるは、實に東洋紡績株式會社にして、其の製造經營地は本社所在地たる四日市市以外六ヶ所を算し、三重縣及び愛知縣並に我が名古屋市は勿論、其他大阪及び遠く愛媛縣に及べり。今是等企業地に於ける織布業の規模を、其の標準の一たる織機臺數に據りて示さば實に左の如きものあり。

地方別	經營地	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年上半年
三重縣	四日市市	一、二一〇	一、二一〇	一、二一〇	一、二一〇	一、二一〇
	津市	二、四二二	二、四二三	三、四九六	三、六五六	三、六五六
愛知縣	名古屋市	六二三	六二二	六二二	六二二	六二二
	半田町	一、〇八五	一、〇八五	一、〇八五	一、〇八五	一、三〇一
大阪府	三軒家町	一	二、三一五	二、三一五	二、三一〇	二、三二〇
	四寶島町	一	二、一九〇	二、一九〇	二、一七〇	二、一七〇
愛媛縣	石町	一	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三一一
合 計		五、三三〇	一〇、一三五	一一、二〇八	一一、三五三	一一、五八〇

即ち同社に於ける織機は工場數の増加に伴ひ逐年増加し、戦前の大正二年を以て最近大正六年上半年に

比較せば、實に一倍以上に達せり。更に是等全工場に於ける各種綿布の製造高を見るに、之れ亦左表の如く逐年増進を示しつつあり。

品 種	三重紡績株式会社		東洋紡績株式会社					
	明治四十五年 大正元年	大正二年	大正三年 計	大正四年 大正五年 大正六年 計				
天竺布	一五、七七、四〇三	一六、九三、三三三	七、三〇、四〇六	八、〇三、八三三	一五、三三、二九〇	一八、六六、二二九	二〇、四九、六四四	一〇、七三、〇五二
粗布	四三、五九、三四四	四二、六三、〇二二	三三、八三、一二三	三六、九五、六二二	三六、八八、七三三	七九、六〇、二六七	七六、一九、七〇四	四一、五七、一五五
厚地粗布	—	—	—	—	—	—	—	—
金 市	—	—	—	—	—	—	—	—
厚地	—	—	—	—	—	—	—	—
遊地	—	—	—	—	—	—	—	—
重 市	九〇、二六六	一、四三、八八八	四七、〇八六	七〇、二五四	一、七三、四四〇	二、三三、七九〇	二五、八九、九九〇	三、八〇、八八六
二 市	八、三三、八四三	五、六五、八九九	一、九〇、七六六	三、三三、二二六	四、二六、〇七四	一〇、八二、〇四二	一一、三〇、四六四	五、七五、八五〇
三 市	五、九〇、四六八	九、一六、六六六	三、二七、〇八一	一〇、〇八、五四八	一三、三四、六三九	八、二九、五九九	九、〇六、二二五	三、九八、〇三九
綿 木	—	—	—	—	—	—	—	—
ネ 生 地	—	—	—	—	—	—	—	—
キ ャ リ コ	二、八五、六三三	一、七五、八五五	—	—	—	—	—	—
合 計	九〇、三六、五九一	一〇三、三九、三三三	四四、八四、三三六	九一、一〇三、五五九	一〇三、九六、八〇二	一三三、四三、三三三	一三三、六三、八六二	六三、五八、五八八

即ち製造高に於ても亦戦前の大正二年を以て大正五年に比すれば、實に一倍以上の増加を示し、更に最近大正六年上半期に於ける六ヶ月間の製造高に於ても、却て大正二年に於ける全一ヶ年間のそれを凌駕せるを見るべし、以て同社に於ける最近織布業の發展を想察するに足らん。

第六章 製造上に及ぼしたる影響

第一節 戦前及び開戦後に於ける製造状態

第一項 綿織物一班

現戦亂が我が名古屋市に於ける綿織物製造上に及ぼせし影響の一斑は、前章叙説に據りて大略之を盡し、併せて本市斯界の愛知縣下及び本邦に對する地位をも明かにしたり。故を以て本章に於ては、本市及び其の附近郡部、即ち廣義に於ける本市及び其の勢力圏内に於ける一般綿織物の内容、即ち各種綿布及び其他の綿織物に關する品種別の製造數額を示し、以て現戦亂に據り如何なる影響を蒙りたるかを觀察せんと欲す。

最近我が名古屋市に製産する各種織物は、綿布其の大部分を占め、其他の綿織物の製産は僅少なること既記の如し。其の種類を概記せば、綿布には大幅物及び小幅物あれども、大幅物は白綿布を主とす。小幅綿布は白木綿、岡木綿、二子其他の縞木綿、緋木綿、織色木綿等とし、其他蚊帳地、袴地類、小倉地類、足袋底、綿フランネル、タオル、及び帶地類等を出せり。是等綿布若くは綿織物の内、廣幅綿布製造數額の最近著しく増進せるは、實に戦亂の影響として顯著なるものに屬す。小幅綿布即ち普通木綿類の内、製造數額の最も大なるは白木綿にして、岡木綿、二子或は縞木綿、及び織色木綿等之に亞ぎて、何れも主要なる位置を占め、綿フランネル亦大なる製造數額を有せり。而して其他の綿織物としては男帶地類を主要

とするのみ。今左に是等各種綿布及び其他の綿織物の、最近數年に於ける製産數額を一眸裡に表示し、併せて愛知縣に於ける各製産數額に對する形勢を想察するの資に供せんと欲す。(※は價格に對する總數量を示す)

年次	品種	名古屋市		郊外郡部		愛知縣全體	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額
明治四十五年 大正元年	廣幅綿布	八、五、六六	七、六一七	一、三、五三	一、九、四四	一、九、六九	二、九、九〇
	白木綿	八、四、六六	五、九〇〇	一、三、五三	一、九、四四	一、九、六九	二、九、九〇
	岡木綿	五、三、六八	二、八、四八	一、七、五〇	八、五八九	一、九、三〇	九、六、〇二
	二子其他綿木綿	二、四〇、三六	二、四、四一	四、六、五七	五、四、八八	二、五、〇〇	二、六、五、六九
	緋木綿	三、六、五五	四、七、四六	七、五、四四	八、七、三三	二、六、三、四四	四、三、五、九三
	同縮木綿	—	—	四、〇、九〇	五、五、八一	三、五、〇、六五	三、一、八、四四
	織色木綿類	七、九、三三	七、九、三三	二、二、九六	七、三、八三	二、〇、三、七八	一、七、六、九四
	綿フランネル	三、五、〇七	一、〇、八八	二、七、四三	三、八、〇〇	一、八、五、四四	四、四、二、九
	蚊帳	—	—	三、七、五五	一、〇、七、四一	三、八、八七	一、七、〇、三六
	小倉地類	二、五、五四	三、二、五九	二、五、九三	三、六、八九	五、五、四四	七、七、八三
	足袋	二〇、〇、七	三、七、九	九、三、九	一、六、八、四九	二〇、五、五五	五、四、八三
	タオ	三、九、五九	六、七、〇	一、五、三六	一、八、二、五	一、九、七、三三	二、六、九、九二
	男帶地類	八、七、七五	五、五、五	—	—	四、〇、四三	三、九、〇、〇三
	女帶地類	一、八、〇、九	二、六、九、九	九、九、三	一、三、〇、五〇	一、三、〇、五〇	二、五、〇、三三
	其他	三、二、三二	三、四、〇、三	七、〇、六	一〇、七、二	七、〇、六	一〇、七、二
合計	—	二、七、三、二、四三	—	一、〇〇、一、〇、〇〇	—	六、八、一、八七	

大正二年	品種	名古屋市		郊外郡部		愛知縣全體	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正二年	廣幅綿布	一、五、九、八、二〇	一、四、三、六、三	六、九、九七	四、六、〇、〇三	四、四、六、七、七一	五、九、〇、八、六
	白木綿	一、三、〇、五、五	一、一、三、〇、四	三、〇、〇、〇〇	一、六、一、〇、八	一、〇、七、七、〇〇	八、二、五、〇、四九
	岡木綿	二、四、六、九七	二、五、〇、〇	七、〇、〇〇	二、五、六、〇	二、〇、一、九、四〇	三、〇、七、三、四
	二子其他綿木綿	一、八、七、七五	一、九、二、三三	八、八、六六	一、七、七、三三	一、五、四、五、七六	一、五、九、八、五三
	緋木綿	一、八、一、九	二、六、六、五	—	—	—	—
	織色木綿	三、五、一、五	五、九、八、四	—	—	—	—
	同縮木綿	—	—	—	—	—	—
	綿フランネル	三、四、九、四	一、九、七、八〇	一、〇、九、六八	三、三、九三	五、一、七〇	一、九、七、八、六八
	蚊帳	—	—	—	—	—	—
	小倉地類	一、五、三、三	一、九、九、三	—	—	—	—
	足袋	一、一、八、八	四、一、六、四	—	—	—	—
	タオ	一、九、六二	三、九、三〇	—	—	—	—
	男帶地類	二、二、五、〇〇	八、七、五〇	—	—	—	—
	女帶地類	一、一、三、六七	六、九、五、四	六、五、〇〇	三、二、五〇	一、八、四、八二	一、五、一、三、四二
	其他	一、五、九、六七	一、七、四、六七	一、七、〇〇	三、三、三三	二、九、〇、〇一	六、八、五、八一
合計	—	四、〇、三、九、八三	—	九、六、四、四	—	三、一、六、五、三〇	

中編 第六章 第一節 戦前及び開戦後に於ける製造状態 第一項 綿織物一斑

女帯地類 (セ)	二、六八	一、六六	三、〇五	一、六三	一、七三	一、〇三
其他 (セ)	四三、七〇	九三、六六	—	六五、三三	* 四七、五六	五、〇九、七〇
合計	—	一、六〇、〇〇	—	三、〇八、〇四	—	三、七九、四六

即ち名古屋市に於ける一般綿織物の製産額は既記の如く大正二年に於ては、前年より著しく増加したりと雖も、翌大正三年に於ては大正元年に比し一割強の増進を示せるに反し、戦前なる大正二年に比すれば二割二分の減少を示せるは、蓋し戦亂影響の爲に外ならず。果せる哉爾後一般商工界の活躍に伴ひ、大に其形勢を一轉して増進の勢を呈し、大正四年に於ては大正三年に比し二割三分強、大正五年に至ては同じく九割四分弱、即ち殆んど倍額に激増し、明に戦亂の好影響を示せり。更に之を各品別に就て觀察するに、大正元年を除外せば大體に於て一般の大勢に伴ひ、開戦當年なる大正三年に於て多くは製産額を減少し、爾後増進の勢を示せるも、仔細に之を攻究せんか、白木綿の如きは開戦後一進一退を示し、大正四年の激増に反し大正五年に於ては激減を呈し、織色木綿も亦開戦後不振に陥り、緋木綿は開戦後増進するに至りたれども、戦前大正二年に於ては、一般の製産額が前年より激増せるに反し、却て激減して不振の跡を示せり。袴地類も亦戦前は緋木綿と同勢を保ち、開戦後増加するに至りたれども、大正元年に及ばず。タオルも亦戦前に於ては叙上兩品と其の趨勢を等ふし、開戦當年に於て著しく減少せしも、爾後其の形勢を恢復し、大正五年の如きは前年に比し五割以上の激増を示せるも、大正元年の多額に及ばず。綿フランネルは開戦當年激減せしも、爾後増進の勢を示し、大正五年の如きは過去數年に於て嘗て見ざる激増を呈せり。其他廣幅綿布は開戦翌年に於て激減せしも、翌大正五年に至り之れ亦從來未だ嘗て見ざる激増を示せり。

り。帶地類に至つては男帶地の逐年に於ける増進著しく、殊に大正五年に於ては前年に比し八割以上、大正元年に比し約一倍の激増を呈せしに反し、女帶地に於ては逐年減少し、大正五年の如きは、之を開戦當年の大正三年に比すれば、僅に其の四割強に減少せり、以て現戦亂の本市綿織物に及ぼせる影響を想見すべし。

翻つて郊外郡部に於ける形勢は、廣幅綿布を主とし、白木綿、岡木綿、縞木綿、及び綿フランネルを主要とし、大正二年に於ては前年に比し市部の一般増進せるに反し、却て減退を示し、開戦當年に於ても亦市部と逆勢を保ちて増進し、廣幅綿布亦同様の趨勢なり。而して大正五年に於ては前年に比し約二倍に増進し、之を更に大正元年に比すれば正に三倍に及べり。白木綿、岡木綿の大正五年製産額は、大正三年に比し前者の減少に反し後者は増進し、更に之を大正元年に比するも同勢にして、綿フランネルの如きも、大正三年に於ては大正元年に比し増進せしも、大正五年に至ては却て減退して大正元年の下位にあり。但し叙上減少せる各品の中數量に於ては増加せるものあるを以て、是等は市價の低落に因れるを察するに足らん。大正五年に於ける帶地類の製産は、大正三年に比し數量及び價額何れも増加せるも、大正元年に比すれば、男帶地類の激減に反し、女帶地類の増加を示せるは、市部に於ける状況と稍異なれり。

第二項 廣幅綿布

機械織廣幅綿布の製造状況は、前項表示により略ぼ之を知悉し得べしと雖も、更に其の品種別に據る表示を試み、其の逐年的の形勢を窺ふ所あらん。先づ其の總數額を再記せば左の如し。

大正五年 四二〇、三七
大正六年 四六四、六八
大正五年 四三九、四一
大正六年 四六六、九三

即ち大正四年下半年に於ける數量が、前期より減少したるを除外せんか、其他の各期は數量及び價額何れも増進し、随つて各年に於ける増加は著しきものあり。

東洋紡績株式會社以外市内に於て株式組織に據る織布業者は愛知織物株式會社にして、其の前身たる愛知織物合資會社は、其の創立後二十有餘年間各種綿織物を製造し來りしも、廣幅綿布の製織を開始せしは、漸く大正五年にして、其の開始後に於ける品種別製造高は左の如し。

品種	大正五年		大正六年上半期	
	數量	價額	數量	價額
三幅金巾	二七、〇〇〇	一七二、八〇〇	六〇、三〇〇	四三四、一〇〇
二幅金巾	—	—	一六、四〇〇	八五、二〇〇
キヤリコ	—	—	一四、九八〇	二二六、一〇〇
細布	—	—	六、五〇〇	五二、〇〇〇
計	二七、〇〇〇	一七二、八〇〇	九八、一八〇	七五〇、六〇〇

天竺布 明治四十五年—大正元年 四〇、〇〇〇
大正二年 四〇、〇〇〇
大正三年 七〇、〇〇〇
大正四年 八〇、〇〇〇
大正五年 一〇〇、〇〇〇
大正六年上半期 一〇〇、〇〇〇

郊外に於ける斯業者は株式會社服部工場、近藤紡績所(及び同織布工場)、豊田自動紡績工場等あるも、前表に於て其の大勢を察知し得べきが故に、一々之が記述を試むるの要なしと雖も、試に其の規模の比較的大なる近藤紡績所(從來個人經營なりしも、大正)に於ける織布製造高を表示して、其の一斑を察するの資に供せん。

二幅金巾	—	三八、〇〇〇	三八、〇〇〇	五〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
三幅金巾	—	—	—	—	八六、〇〇〇	七〇、〇〇〇
キヤリコ	—	—	—	—	一一、〇〇〇	一〇、〇〇〇
細綾	—	—	—	—	—	三〇、〇〇〇
市布	—	—	—	—	—	四〇、〇〇〇
細布	—	—	—	—	—	一〇、〇〇〇
計	四〇、〇〇〇	七八、〇〇〇	一〇八、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	一六八、〇〇〇	三三〇、〇〇〇

即ち同工場に於ける開戦後の製織狀況は、漸次製品種類を増加せる結果、其の製造高は逐年増加し、最近大正六年上半期間のみの數量を以てするも、明治四十五年—大正元年全一ヶ年の數量に對し實に八倍以上に達し、又大正二年に比するも三倍以上に及べるを以て、他の當業者に於ける製造増進の、大正六年に於て著しきものあるは蓋し明かなり。

第二節 事業擴張の狀況

第一項 綿織物一班

最近數年に於ける本市綿織物發達の狀況は、前節絮説の如く、開戦後に於ける活躍は實に顯著なるものあり。随つて斯業の規模は、其の製産數量と伴ひ、近年著しく擴張され、殊に大正五年の如きは實に異數なる現象を呈し、製造工場増加は爲に其の設備、及び職工等の激増を來たし、到る所工場の擴張、織機の増設を見ざるなきの活況を呈せり。今綿織物業に關する是等の現象を概説し、如何に現戦亂の爲に好影

響を蒙りたるかを窺はんと欲するも、由來本市は勿論本縣斯業の常態として、勿論各種綿織物の專業者ありと雖も、時々綿織物以外の製織を試み、彼此相錯雜せるの結果、截然綿織物業のみに關する事業規模若くば其の擴張の正確なる統計を求め難く、又殆んど其の倚るべきものなきが如くなるを以て、遺憾ながら一般總織物業に關する叙上の現象を窺ひ、以て綿織物業に關するそれを想察することとせん。蓋し本市綿織物業産價額は前既に絮説せるが如く、織物業産價額に對し三分の二内外の多數を占むるの結果、大略其の大勢を知り得べきを以てなり。以下各事項に分ち、其の大勢を概叙せん。

(1) 製造業者 明治四十五年—大正元年に於ける工場は勿論、家内工業、織元、及び賃織業を通じての市内製造業者数は五千三百七十一戸なりしもの、大正三年に於ては戰亂の影響を蒙りて八百四十一戸の減少を來したり。然るに爾後形勢の恢復に伴ひ大正五年に至りては、大正三年に比し四百二十三戸を増加せしと雖も、大正元年に比すれば尙ほ四百十八戸の減少を來たし、一見斯業の衰退なるが如きの觀を呈せるも、之れ家内工業其他に於て減少せしに因るものにして、比較的大規模の工場數に於ては開戦後一時は減少せしも、大正五年に至つては、大正元年に比し二割六分強の増加を示し、事業の規模を大ならしめたるを悟らん。郊外郡部に於ては其の増減不規則にして、一進一退の跡を止め、開戦當年は却て著しく増加せしに反し、其の翌年及び翌々年に至りては減少せしも、大正元年に比しては前者八割強、後者約一倍の増加を示せり。而して家内工業其他を除外せる工場數のみに就て觀んか、開戦當年に於ては前年の減少に反し三割を増加せるも、翌大正四年に於ては一割強を減じ、更に大正五年に至つては再び増加(二割八分強)して、最近數年に於て未だ曾て見ざりし多數を示せり。乞ふ左表に據りて其の詳細を窺ふべし。

年次	市			郡部		
	工場	家内工業	織元	賃織業	合計	合計
明治四十五年—大正元年	一九五	二七六	四〇〇	四、五〇〇	五、三七一	三、五
大正二年	一八六	一三四	五	四、〇〇八	四、四三四	三〇
大正三年	一八五	二四二	三	四、一〇〇	四、五三〇	三九
大正四年	一七一	二八二	六	四、〇五〇	四、五〇九	三五
大正五年	一五九	三三八	五	四、三六一	四、九五三	四五

〔備考〕 大正四年以降は統計様式を異にし、織元及び賃織業以外は、職工十人以上のもの、夫れ以下のものに區別せり。即ち前者は大正三年迄に於ける工場、後者は同家内工業と見做し、夫々該欄に計上せり。下記機數及び職工數に於ても亦然り。

(ロ) 織機 織機は動力使用のもの、然らざるものとあり。前者は主として工場に使用され、後者は賃織業の如き家庭的製造業者に於て多數を占む。今各別に就き最近數年に於ける増減の状況を觀るに、力織機の開戦後殆んど工場以外の家内工業者に於ける使用なくして、益々工場に集中され、其の戦前なる大正二年に於ける設備數は前年に比し一割八分弱の減少を來せしも、大正三年に於ては一割六分強の増加を示せるに反し、開戦後の大正四年に於ては九分強を減せり。然るに大正五年に至ては、前年に比し一躍六割五分強の増加を來たせり。郊外郡部に於ける工場は、大正四年に於て前年より四割五分強を減少せし外、他の各年は何れも前年より増加し、殊に大正五年に於ては十六割四分弱の激増を示せり。工場外に於ける製造業者の力織機は寔に僅少なるを以て、多く之を顧るの必要なし。翻て手織機に於ける増減を觀るに、市部に於ては大正二年に於て前年より増加せるを除いては各年減少を示し、大正五年の如きは、大正三年に

比し二割五分強の減少を示せるに反し、郊外部に於ては大正二年は前年より減少し、爾後兩年は遞増の勢を呈し、大正五年は却て前年より四割四分強を激減せり。然るに家内工業及び賃織業者は大體に於て逐年増加し、大正五年に於ては著しく増加せり。斯の如く工場に於ける手織機の減少せるは、漸次力織機に轉換せるものにして、即ち製造經營の進歩と認むべし。而して是等兩機が何れも大正四年に於て減少し、翌大正五年に至り激増せるは、蓋し一般總織物界に於ける消長に準應せるものと稱すべし。左に是等織機數に關し、最近數年間の各製造規模別に據る増減を表示し、以て其の消長を推敲するの資とせん。

年次	區域別	力織機		手織機		合計
		工場家内工業	賃織業	工場家内工業	賃織業	
明治四十五年 大正元年	名古屋市	三六八	二	四八〇	七四八	一,〇〇八
	郊外部	一〇三	五	一三五	三三	一,八三
大正二年	名古屋市	三三三	一	三〇六	五三九	一,〇五五
	郊外部	一、五四	六	一、四七	二六	二、二四
大正三年	名古屋市	三、七三	一	三、七三	四、七〇	一〇、一〇〇
	郊外部	三、〇九	三	二、二二	五七	一〇、一〇〇
大正四年	名古屋市	二、四四	一	三、四四	四、六一	一〇、〇一七
	郊外部	一、〇四	一	一、〇四	六二	一〇、〇一七
大正五年	名古屋市	四、一〇三	一	四、一〇三	三、五三	一六、七四七
	郊外部	二、八四九	一	二、八四九	三、四四	一、二二七

〔備考〕 △印は足踏機

(ハ)職工

製造經營規模の擴張及び織機數の激増に伴ひ、使用職工數に於ても亦最近著しく増加せり。然れども工場使用職工に於ては、動力使用漸次増加し、人力を節約するを以て、寧ろ減少を呈し、唯大正五年に於ては斯業の擴張に伴ひ激増を示せるを觀る。然れども動力使用以外即ち主として手織機使用の家内工業其他に於ては、大體上逐年増加せるは、斯界の状況上正に然るべきものとす。以上は市部に於ける概觀なるが、翻つて郊外部に於ては、大正二年に於ける工場及び家内工業者使用職工數は、前年より増加せるも、爾後兩年は著しく減少し、大正五年に於ては、一般の大勢に伴ひ激増せり。賃織業者に於ては市部に於ける減少の趨勢に反し、郊外部に於ては、大正四年を除外せんか、何れも増加せるは郊外部に於ける斯業經營規模の小なるの證左たるべし。而して其の市部たると將た又郊外部たるとを論せず、男工比較的僅少にして、女工の大部分を占むるは、蓋し斯業の狀態上當然の現象と稱すべし。左に最近數年間に於ける各製造經營者別に據る男女職工數(日平均使用數)を表示し、戰亂影響に因る其の増減を觀察するの資に供せん。

年次	性別	名古屋市		郊外部		合計
		工場家内工業	賃織業	工場家内工業	賃織業	
明治四十五年 大正元年	計	三、三三	一	一、九四	五	三、四七
	男	三、三三	一	一、九四	五	三、四七
大正二年	計	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
	男	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
大正三年	計	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
	男	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
大正四年	計	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
	男	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
大正五年	計	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八
	男	三、〇三	一	二、三三	四	二、〇八

中編 第六章 第二節 事業擴張の状況 第一項 綿織物一班

廣幅綿布の織機は概ね力織機のみにして、手織機は其の數少なし。之れ即ち工場制工業に據る斯業を主とせるが爲めなり。大正四年は一般に織物界不振の結果、市部に於ては工場數と相照應して、織機數も亦減少せしむ、郊外郡部に於ては著しく増加を示し、益々發展するに至れり。大正五年に於ては一般織物界の活躍に伴ひ、本品も亦内外共著しく其の需要を煥起したるが故に、織機數に於ても亦工場或は製造業者の増加に伴ひ著しく増進し、明に事業擴張の跡を示せり。

(ハ)職工 事業規模擴張の勢斯の如くなるを以て、使用職工の數も亦著しく増加するに至れり。即ち市部に於ける男女合計數に就て觀るに、大正二年に於ては前年より五割七分弱を増加せるも、大正三年及び同四年の兩年は遞減の趨勢を呈せしに對し、大正五年に至つては四倍半以上に激増し、如何に盛況なりしかを示せり。郊外郡部に於ては明治四十五年—大正元年以降逐年増加し、大正五年に於ては前年に對し三倍八割の多數を算するに至れり。而して是等職工は女工を主とし、男工は僅少なること、一般綿織物と差異あるを見ず。乞ふ左表に據りて一日平均職工數の逐年的増減、及び其の男女別の形勢等を觀察すべし。

年次	名古屋市		郊外郡部		計
	男	女	男	女	
明治四十五年—大正元年	六二八	四一七	二六八	二二〇	二四六
大正二年	七五	六七六	三五	二九〇	三二五

年次	大正三年	大正四年	大正五年
大正三年	九四	六五三	七四七
大正四年	一〇四	六三〇	七三四
大正五年	四五二	二、九四一	三、三九三

本表計上の職工數は主として工場使用のものなりと雖も、大正五年に至つては斯業の發展に伴ひ、市部に於ける家内工業及び賃織業者に於て注目すべき形勢あるに至れり。即ち本表同年に於ける市部數字中家内工業は男工三十人、女工百六十二人、計百九十二人、賃織業は男工十五人、女工七十四人、計八十九人を算せり。時局影響に因る職工數増加の著しき以て觀るべし。

尙ほ現東洋紡績株式會社愛知工場に於ける織布職工數を、戦前なる舊三重紡績株式會社時代よりの増減を見るに、左表の如し。

年次	明治四十五年—大正元年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年上半期	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
計	四五	四二六	五五	四六八	五三	四一七	四七	四六六	五七	四六一	六七	四六一

即ち開戦當年なる大正三年は著しく減少したるも、爾後漸次増加し、最近に至りては戦前大正二年に比し増加するに至れり、以て一般當業者に於ける職工の状況を察すべし。

第三節 原 絲
第一項 製 造 量

本市に於ける織布用原絲の製造は、最近益々發展し、郡部に於ける盛況と相俟つて、本邦斯業上有數の地位を占むるに至れり。随つて能く本市に於て之を自給するを得べしと雖も、由來本市に於ては太絲の製造を主とせるを以て、細絲は勢ひ之を他よりの供給に俟たざるべからず。茲に於てか最近織布業者は自給の目的を以て、自ら原絲製造の兼營を試むるもの輩出せり。市部に於ては愛知織物株式會社、郊外に於ては近藤紡績所、豊田自動紡績工場の如き之れなり。更に株式會社服部織布工場に於ても亦近々此の如き計畫ありと云ふ。其他綿絲紡績業の一斑は既に前回の調査に於て之を攻究したるを以て、其の詳細は之に譲り、單に左に本市製造高のみを附記するに止めんとす。

年次	名古屋市		郊外部		合計
	數量	價額	數量	價額	
明治四十五年—大正元年	三、四七〇	八、七六、六七〇	—	—	三、四七〇
大正二年	六、九三三	九、九五、八五二	—	—	六、九三三
大正三年	六、四三〇	八、〇九、六五五	—	—	六、四三〇
大正四年	五、七六八	五、三三、三〇八	三、五〇〇	一、七、七〇〇	九、二六三、〇〇八
大正五年	五、〇〇八	七、七六、二一六	一、七、五三三	—	六、七八四、七四九
大正六年上半年期	三、三三三	五、〇八、四九八	—	—	三、三三三

即ち大正三年及び同四年に於ては時局の影響を蒙りて、製造數量を減少するに至りしも、大正五年に至つては著しく増進するに至れり。但し全國綿絲製造高は逐年増進の趨勢を呈し、市價の維持策として操業短縮を試みたるの結果、本市へも其の影響を與へしに注意すべきなり。

第二項 價格

當市に於ける綿絲の價格は大阪三品取引所の定期相場に影響さるること鮮少なからざるを以て、今其の各年平均相場に據りて騰落の大勢を顧るに、明治四十五年—大正元年に於ては百四拾四圓四拾錢貳厘なりしが、大正二年に於ては稍々騰貴して百四拾四圓八拾九錢貳厘に上れり。然るに大正三年に於ては下落して百拾參圓八拾八錢八厘となり、翌大正四年に於ては更に一段の下落を呈して百〇七圓貳厘となりしも、爾後騰貴の趨勢を採り、大正五年に於ては一躍百四拾五圓拾壹錢九厘に進み、更に大正六年(十一月迄)に至つては貳百五拾參圓〇貳錢の暴騰を示すに至れり。即ち開戦後の大正四年は實に最近數年に於て未だ嘗て見ざりし最低價なりしに反し、大正六年に至ては其の反動的形勢の下に大暴騰を演じたるは、主として時局の影響として顯著なるものに屬せり。

翻て當市に於ける相場を観るも亦叙上の大勢に左右され、略ぼ其の趨勢を一にせり。今左に數十種に上る綿絲の内より、特に當市に於て製造さるるもの、或は一般に需要多きもの、内より數種を選び、其の各年平均の平均相場を表示して、騰落の跡を察知するの資とせん。(單位一捆)

年次	金キ 16	青鷹 16	鐘紡 16	三重 20	大阪並 20	紫鷹 30	黒龍 30	雉子 42/2	瓦斯絲 60/2	紫鳳凰 60	シムラツク 60/2
明治四十五年	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
大正元年	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
三月	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
六月	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
九月	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇
十一月	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇	三三、〇〇

燃料は機關用、其他暖房管、糊付等に用ふるを主とし、其の使用多量に達するも、本市綿織界に於ける使用量の精確なる數字を得ず、又之を求め難き事情存するを以て、試に市内二株式會社に於ける使用量を示し、其の一般を察知するの資に供せん。即ち廣幅綿布製造量の最大を占むる東洋紡績株式會社愛知工場、明治四十五年以降に於ける石炭使用量を表せば左の如し。

年次	石炭使用量	年次	石炭使用量
明治四十五年—大正元年	八、一二三	大正四年	七、三九九
大正二年	七、七〇六	大正五年	八、一〇五
大正三年	七、三九九	大正六年上半年期	四、八〇五

本表石炭使用量は綿布専用にあらずして、綿絲用をも包有すと雖も、同工場製造綿絲量との對照上綿布用の數量を察知するに難からざるべし。

次に愛知織物株式會社の大正五年に於ける織布用石炭使用量は三百七十一噸餘に過ぎざりしも、同六年上半年期に於ては著しく増加して五百四十七噸に達せり。

第二項 電力

數年以前までは電力の使用大ならざりしも、最近其の有利なるを一層認識するに至りたると同時に、一面昨春以降に於ける石炭價格の暴騰に伴ひ、最近其の使用益々普及するに至れり。即ち名古屋電燈株式會社の戦前大正元年以降に於ける綿絲、綿布及び一般綿織物業者に供給せし電力量を表せば左の如し。

年次	市内	郊外	合計
明治四十五年—大正元年	七、一七	四、四〇	五、一七
大正二年	三、五六	四、四〇	七、九六
大正三年	三、四九	四、四〇	七、八九
大正四年	九、六三	一、四九	二、四五
大正五年	三、九六	九、〇六	一、三〇
大正六年	四、七四	九、六一	一、四五

即ち戦前に於ける營業使用の電力は、一般に少量なりしも、開戦後殊に大正五年以來俄然著しく増加し一般に普及するに至れり。

更に一般織物業者の明治四十五年—大正元年以降に於ける用途別電力使用量を表せば左の如し。

種別	明治四十五年—大正元年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年		
	個數	馬力數	個數	馬力數	個數	馬力數	個數	馬力數	個數	馬力數	個數	馬力數	
織物	上半期	二五	三〇九〇	元	三、〇〇〇	四〇	三、四七五	四〇	三、三三五	五五	四、九七五	八五	一、二七五
	下半期	三七	三、八五五	元	三、〇七〇	四〇	三、四七五	四〇	三、四七五	五五	四、九七五	八五	一、二七五
織物	上半期	一六	六、八五	元	六、八七〇	四	六、八七〇	四	六、八七〇	六	一、〇八五	一〇	一、〇八五
	下半期	一六	六、八五	元	六、八七〇	四	六、八七〇	四	六、八七〇	六	一、〇八五	一〇	一、〇八五
織物	上半期	二	四、三五	三	四、七五	一	四、九七五	一	四、九七五	一	九、九五	一〇	一〇、九〇
	下半期	三	四、八五	二	四、八五	一	四、八五	一	四、八五	一	一〇、〇〇	一〇	一〇、〇〇
織物	上半期	二	六、〇〇	三	六、六五	一	一、二七〇	一	一、二七〇	二	二、三五	三	二、三五
	下半期	三	六、〇〇	三	六、六五	一	一、二七〇	一	一、二七〇	二	二、三五	三	二、三五

欄	計		計		計		計		合計
	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	上半期	下半期	
織物整理	11	11	11	11	11	11	11	11	68
染	11	11	11	11	11	11	11	11	68
起	11	11	11	11	11	11	11	11	68
付	11	11	11	11	11	11	11	11	68
合計	11	11	11	11	11	11	11	11	68

即ち電力の用途も亦開戦後殊に大正五年以降に於て増加し、戦前に比して普及せるの結果、其の使用電力量も亦開戦後激増するに至れり。即ち大正六年の如きは戦前大正二年に比し装置數に於ては三倍以上、使用電力量に於ては三倍以上に激増したるを觀るべし。

第三項 價格

(イ)石炭 開戦以前に於ける炭界は一般に不況なりしを以て價格随つて低位にありしが、大正三年に至り稍々恢復し價格亦随つて昂騰せしも、現戦亂の勃發に因り再び不況に陥りて炭價の下落を來し、大正四

年に入るも依然同様の趨勢を呈せしが、大正五年春期頃より形勢を一變し、一般製造工業の活躍に伴ひ、需要順に増進し、價格の昂騰を促すこと著しく、同年末に於ては年初に比し、約一倍の騰貴を呈し、大正六年に入るや、其の形勢益々著しく、遂に戦前の低價に比し三倍半以上に達し、爲に製造費に至大の影響を及ぼせり。即ち其の大勢を表示せば左の如し。

一、筑豊一等炭(名古屋港着、單位一噸)

年	月	價格
大正二年	三月	四、九五
	六月	五、二二
大正三年	九月	五、一五
	十二月	六、五五
大正四年	三月	六、〇〇
	六月	六、二五
大正五年	九月	六、一〇
	十二月	七、一〇
大正六年	三月	七、五〇
	六月	八、〇〇

二、筑豊二等炭(名古屋市内相場、單位一萬斤)

年	月	價格
大正二年	三月	三、六二
	六月	三、七五
大正三年	九月	三、五〇
	十二月	三、九〇
大正四年	三月	四、〇〇
	六月	四、一〇
大正五年	九月	四、一〇
	十二月	四、二〇
大正六年	三月	四、三〇
	六月	四、四〇

(ロ)電力 電力料金は供給者と各製造業者との契約を以て使用の多寡其他の事情に據り、各々其の料率を異にし、其の間多少の差異あるを免れざるが如しと雖も、本市電力供給者たる名古屋電燈株式會社の料

金制定に據れば、定額及び従量の兩者に二大別して、各々其の料率を定め、過去數ヶ年間に於ては、兩者とも戦前一兩年は殆んど變動を認めざりしも、兩者とも大正三年に於て之を改定し、定額料金は更に大正五年に於て再び改正を試み、以て今日に及べるものにして、漸次料金を低廉ならしめしは、最近に於ける炭價暴騰と大に其の趣を異にするを觀るべし。今左に定額電力料金の變動を表示せん。

馬力別	明治四十五年—大正二年		大正三年—大正四年		大正五年—大正六年	
	晝間	晝夜間	晝間	晝夜間	晝間	晝夜間
一	一〇、七五	二一、五〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
二	二一、五〇	四三、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
三	三二、二五	六四、五〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
五	五三、七五	一〇七、五〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
七	七四、三五	一四八、七〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
一〇	九二、〇〇	一八四、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
一五	一二九、〇〇	二五八、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
二〇	一六九、〇〇	三三八、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
二五	二〇一、〇〇	四〇二、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇
三〇	二二三、〇〇	四四六、〇〇	一〇、八〇	一四、五〇	五、五〇	一〇、〇〇

五十馬力以上は使用者との契約に據り特に割引を行ふことに規定せり。次に従量電力料金は、明治四十五年—大正元年に於て「キロワット」に付き晝間四錢、夜間八錢と制定

し、翌大正二年に於ては變動なかしも、大正三年に至り左の如く改定し、現時尙ほ之に據れり。

馬力別	一馬力		馬力別	一馬力	
	晝間	晝夜間		晝間	晝夜間
一馬力以上	四、〇〇	七、二五	二十馬力以上	三、六〇	六、五〇
五馬力以上	三、八五	七、〇〇	三十馬力以上	三、五〇	六、二五
十馬力以上	三、七五	六、七五			

第五節 荷造材料及び荷造費

第一項 荷造材料

荷造材料としては、内地向は主として蓆及び繩を使用し、是等の價格は戦前に比し概ね五割内外の騰貴に止まれるに反し、輸出向に使用する「ハンドグロス」及び帶鐵の價格は、實に約四倍の暴騰を呈し、而かも其の調達意の如くならず、其の不便著しきものあり。即ち繩類は大正三年に於ける大繩一貫九錢、小繩一貫拾七錢より大正五年には前者拾錢、後者拾六錢に騰貴し、大正六年に至りては更に前者拾參錢、後者拾八錢に昂騰し。蓆類は一枚參錢八九厘（ヒゲ蓆）乃至六錢（普通）内外より、大正五年の五錢五六厘乃至七錢、大正六年の五錢六七厘乃至九錢に昂騰せり。其他「ヘシヤン」は一呎に付き大正三年の六錢五厘より、大正五年の七錢八厘、大正六年には八錢四厘に昂騰し、荷造紙は千枚に付き拾八圓より、大正五年の貳拾貳圓、大正六年の貳拾六圓に、商標紙は大正三年の八拾錢より、大正五年の壹圓參拾錢、大正六年の壹圓

六拾錢に何れも昂騰せり。今試に後段記載の三者に於ける平均昂騰率を表示せば、實に左の如し。

	大正三年一月	大正四年二月	大正五年二月	大正六年二月	大正六年七月
ヘシヤン	一〇〇	七三	八二	八九	一一六
荷造紙	一〇〇	一〇〇	一二三	一六九	一八四
商標	一〇〇	一一七	二〇八	二二三	二九二

第二項 荷造費

荷造材料の開戦後に於ける昂騰は、前項所載の如くなるを以て、荷造費も亦之に準じたる昂騰を呈するに至りたるは、蓋し自然の勢なり。荷造費としては此の外尙ほ勞力賃の打算を要するを以て、今其の職工賃金の昂騰如何を觀るに、戦前に比し大約一割乃至二割内外の昂上を來たし、戦前八拾錢内外の職工賃金は最近九拾錢以上壹圓内外に上れるが如し。随つて各相割當荷造費に於ても亦、叙上の割合に昂上したるは勿論なりとす。

第六節 職工賃金

本市に於ける織布職工賃金は、其の工場工業たると、家内工業たるとに因り、自ら差異あるを免れず。家内工業は其の規模工場工業に比し同日の論にあらざるは勿論、随つて職工賃金に於ては、概ね工場工業に比して低廉にして、且つ各製造業者の事情の異なるに従ひ、勢ひ差異あるを免れざるの結果、規一の數字を示し難きを以て、主として工場工業に於ける職工賃金を示し、以て其の大勢を察知するの資とせん。今東洋紡績株式會社の報告に基き、其の織布職工賃金の最近數年に於ける高低を表示せば左の如し。

月次標準	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
三月	最高 一、一三	最高 四七	最高 一、二四	最高 四九	最高 八二	最高 五四	最高 八五	最高 五〇	最高 八九	最高 五三
三月	普通 五六	普通 三四	普通 六〇	普通 三三	普通 六〇	普通 三三	普通 五六	普通 三三	普通 五八	普通 三四
三月	最低 四〇	最低 一四	最低 四二	最低 一四	最低 五四	最低 一五	最低 三八	最低 四二	最低 一五	最低 四〇
六月	最高 一、一三	最高 四八	最高 一、一〇	最高 五一	最高 八二	最高 五〇	最高 八九	最高 五一	最高 九二	最高 五五
六月	普通 六〇	普通 三五	普通 六〇	普通 三五	普通 五七	普通 三三	普通 五六	普通 三三	普通 五八	普通 三四
六月	最低 四一	最低 一四	最低 四一	最低 一四	最低 三九	最低 一三	最低 三八	最低 一五	最低 四二	最低 一五
九月	最高 一、一六	最高 四八	最高 一、〇〇	最高 五八	最高 八五	最高 四九	最高 八九	最高 五二	最高 九二	最高 五五
九月	普通 六〇	普通 三三	普通 五八	普通 三三	普通 五四	普通 三二	普通 五六	普通 三二	普通 五九	普通 三五
九月	最低 四二	最低 一四	最低 四〇	最低 一四	最低 三八	最低 一四	最低 三八	最低 四三	最低 一五	最低 四六
十二月	最高 一、一二	最高 四九	最高 一、〇〇	最高 五一	最高 八五	最高 五一	最高 八九	最高 五四	最高 九二	最高 五八
十二月	普通 六一	普通 三四	普通 五八	普通 三二	普通 五六	普通 三三	普通 五七	普通 三三	普通 五九	普通 三八
十二月	最低 四二	最低 一五	最低 四一	最低 一五	最低 三八	最低 一四	最低 三九	最低 四〇	最低 一四	最低 四七

本表に據るときは、最高、普通、及び最低の各標準を異にするに従ひ、各年に於ける高低の状況を異にす。雖も、概観上明治四十五年—大正元年に於ける賃金一般に高位を保ち、大正三年までは各年漸落の趨勢を採れり。然るに大正三年以後即ち開戦後に於ては、其形勢を變じ逐年昂騰の傾向を呈し、最近に於ては概略一割内外乃至二割以上の高位を現はすに至れり。蓋し斯の如きは一般機業界の状況、及び現戦亂の

影響に基因するは勿論にして、戦前一時活況を示せし斯界も、其の状勢の變異を呈し來りしと同時に、現歐洲戦亂勃發の悪影響を蒙りたるの一事は、大正三年に於ける賃金の低落となりしも、爾後其の形勢の轉換を來たし、綿織物は勿論各種織物の海外輸出増進し、斯界は非常なる活況を演ずるに至りしより、開戦後に於ては其の餘響を蒙り、漸次職工賃金の昂騰を促すに至りしなり。

第七章 販賣上に及ぼしたる影響

第一節 取引方法

從來本業者の對外貿易は多く間接取引にして、大阪、神戸等の本邦若しくは外國商人の手を経由して行はれ、現戦亂に因りて輸出額著しく増大したるも、本市當業者が直接取引に進まんには、其の事業の經營規模の擴張を要すると共に、煩瑣なる手數と之に伴ふ不安危険あるが爲め、之れに據るよりも比較的安全簡易なる間接取引に據るを便とする者最も多數を占むるの狀態にして、現戦亂の取引革新上に及ぼしたる影響は比較的顯著ならずと雖も、漸次直接貿易に進まんとする機運を醸成しつつあるは、次節絮說の名古屋港に於ける輸出貿易狀況に徴するも亦明かなり。

第二節 海外輸出移出

第一項 輸出

戦亂勃發當年なる大正三年に於ける海外輸出は前二箇年より著しき増大を示し、之を前年に比較するに

四拾參萬六千五百拾參圓の増加を呈し、翌大正四年に於ては前年に比し四拾參萬八千六百〇七圓の減少なるも、尙ほ之れを大正二年に比較すれば、甚だしき徑庭なきを見るべく、其の原因が一に前年の輸出旺盛に因る反動的現象に外ならざるを知るべし。然るに同五年には百六拾參萬五千餘圓の輸出額を以て、前年に比し七拾壹萬九千餘圓の増加を示し、更に同六年には、上半期のみに於てすら既に前年に勝ること實に貳拾參萬九千餘圓の價額を示せり。之れ戦亂の影響に因れるものなるは論を俟たざる所にして、特に大正四年以後の新販路たる印度、南洋並に從來よりの顧客地たる支那方面に於ける歐米品の輸入杜絶、又は減少に因由するものに外ならざるなり。左に最近數年間に於ける名古屋税關支署通過の輸出綿織物直接輸出貿易の狀況を表示せん。

品名	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年(十月迄)	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
支那	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
關東州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海峽植民地	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
印度	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
支那	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
關東州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海峽植民地	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
印度	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

本表に據るときは、本市直接海外輸出綿織物の輸出先は、支那を最大とし、關東洲之に亞げるも、之を品種別に就て観るときは關東州最大を占むるものなり。其他の輸出先は印度、海峽植民地、香港、濠洲、米國及び露西亞等なれども、後四者への輸出量は僅少にして、多くは開戦後始めて輸出を見るに至りたるものなり。更に各品種別に就て観るに、戦前よりの輸出は白木綿、色木綿、綾木綿、緋木綿、生金巾及び生シーチング、天竺布、綿製浴巾等にして、縞木綿、晒金巾及び晒シーチング、小倉織、綿フランネル、手巾等は主として開戦後輸出を開始したるの状態なり。即ち最近に至り本市綿織物の海外輸出發展を來したるは、主として現戦亂の好影響に基けるを知るべきなり。

第二項 移出

朝鮮移出に在りては、戦亂勃發當年たる大正三年に於て、特に異常の減少を來せるは、戦亂に因り一方支那方面への輸出増加の影響に因るものと見るべく、同年支那輸出の激増と相對照して其間の事情を察すべし。然れども翌同四年に至りては直ちに原狀を恢復し、戦前に於ける輸出額を凌駕するに至り、供給漸く調節さるゝに至れるを見るべし。而して同五年に於ては貳拾八萬參千四百七拾四圓を示し、前年に比較して實に貳拾萬七千七百拾圓の増大を現はし、同六年上半年期のみならず、更に一段の激増を呈して、貳拾貳萬貳千五百四圓を算し、前一ヶ年の約八割を占むるの盛況を示せり。斯くの如く朝鮮移出額が開戦後激増せる所以のものは、一は逐年同地方民情の發達に因るも、一は正に戦亂の影響に基く諸外國輸入品の

減退にある事は疑ふべからざる事情なるが如し。左に明治四十五年—大正元年以降に於ける本市より朝鮮に對する直接移出の狀況を表示せん。

品名	明治四十五年—大正元年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
白木綿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
色木綿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
縞木綿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
緋木綿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
綾木綿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
小倉織	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
綿縮緬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
綿フランネル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
生金巾及生シーチング	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
晒金巾及晒シーチング	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天竺布	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
緋金巾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
手拭地	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
其他ノ綿織物	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
綿製浴巾	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

中編 第七章 第二節 海外輸出 第二項 移出

現はせり。而して叙上地方以外に於ける集散状況を概示せば左表の如し。

東京以下十地方	一九、四九八	其他地方	五、四八四	合計	二四、九八二
發送	八、五二三		二、九九七		一一、五一〇
到着					

即ち前表に於ける東京以下十地方以外に對する集散は、僅に其の三分の一内外に過ぎざるの少數にして、發送は到著の約二倍に達せるより觀れば、明かに本市の供給地たるを證するものと云ふべし。

第四節 在荷状況

在荷品の多寡如何は、一面製造状況と相俟つて、市價に影響する所鮮少なからざるを以て、今試に市内倉庫業者たる東海倉庫株式會社及び名古屋倉庫株式會社の兩社に於ける綿織物の出入、及び在庫品の状況を叙し、以て其他に於ける一般的状況を觀察するの資と爲さん。

第一項 出入

明治四十五年以降最近に至る市内二倉庫業者へ入庫せる綿織物の數量を見るに、大正二年は前年より激減して、最近數年間に於ける最少量を示せしが、翌大正三年は其の反動的に著しく増加し、大正元年及び同四年の數量以上に達せり。大正五年に至つては前年に於ける前々年よりの減少に反し、之れ亦著しく増加し、更に大正六年に於ても亦前年より増加するに至れり。評價額に於ては略ぼ數量と其の趨勢を等しうし、大正二年亦最近數年に於ける最少量を示して前年より減少し、大正三年に於ては増加せしも、同四年に於

ては再び減少を示せり。然るに同年以後は増進の傾向を呈し、大正六年の如きは前年に比し七割五分強を増加し、最近に於ける最大額を示せり。翻つて出庫の状況を觀るに數量上に於ては明治四十五年—大正元年を最少量とし、爾後一進一退の趨勢を辿り、其の最大量は大正四年にして、開戦當年の大正三年は其の前後兩年に比し少量なりとす。評價額に於ては明治四十五年—大正元年を以て最少量とせしも、爾後遞増の趨勢を持し、大正六年に於ける數額は實に其の最大額を示せり。蓋し大正二年に於ける出入庫品及び同四年に於ける入庫品は比較的少額にして、大正五年に於ける出入庫品、及び同六年に於ける出入庫品評價額が、一般に多額なる所以のものは、明かに市況の振否及び價額の騰落に因由したるものと觀るを得べし。今叙上數年間に於ける出入庫品の統計を表示せば左の如し。

年	入庫		出庫	
	數量	評價額	數量	評價額
明治四十五年—大正元年	三三、九〇八	二、〇四五、七二三、 ^甲 六一〇	二二、九一八	一、六二一、三九八、 ^甲 七七〇
大正二年	二二、二〇一	一、六五二、六四一、一一〇	三〇、九〇二	一、八八三、五五五、二一〇
大正三年	三五、九六二	二、二三六、〇三七、〇六〇	二九、二八〇	二、〇一五、八二九、六六〇
大正四年	三四、五四五	二、〇一九、三八八、二六〇	四三、一二九	二、四二三、七五五、六三〇
大正五年	四五、二九一	三、五六六、八三二、 ^乙 七六〇	四二、九六二	三、一二〇、〇六三、 ^乙 七八〇
大正六年	四七、七六〇	六、二五九、六八五、 ^乙 五八〇	四二、三八三	五、一五七、二〇八、 ^乙 一六〇

第二項 在荷

翻つて各月末に於ける出入庫品の残高、即ち在庫品の増減状況を表示せば、實に左の如し。

月次	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年		大正六年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
一月	六六八	四九、七七	二、八六	一、五九	三、二二	三、三三	三、四六	四、三三	四、三三	四、三三
二月	六八七	四九、八五	二、九一	一、六二	三、九七	三、三三	二、六八	一、五三	四、七〇	四、六〇
三月	六三三	四七、七六	一、〇三〇	五、二〇五	三、九七	二、九六	二、五九	一、八三	四、七〇	四、六〇
四月	六五九	四七、〇〇	七、五六〇	四、〇三〇	二、五五、四〇三	五、〇七六	二、六六、九六七	七、〇二二	四、六六、四四〇	六、六九、五〇二
五月	七、三六	五〇、九五	七、五二三	四、六、三三二	七、〇三九	六、五三三	三、九、〇三三	二、七、六六	八、三、〇〇〇	七、七三
六月	九、二〇五	六二、七二	七、九五〇	五、七、三四	八、七九九	六、六四四	四、〇、三三	二、五、三〇	九、五、八三〇	五、一、八六
七月	一、一七七	六四、〇三	五、八三	三、七、三〇	七、七三	四、一、七二	九、四、四五	三、〇、九	八、四、四〇	四、三、七
八月	一、三六五	七〇、〇四	四、四七	三、五、三三	九、三	五、八、七九	八、七、六	四、六、七三	六、五、七三	五、一、七二
九月	二、六四一	五八、四四	二、六八	一、七、七二	八、〇四	四、七、三五	七、〇、九	七、四、九	五、七、八〇	七、三、〇
十月	二、七三三	五九、五二	三、五二二	二、七、九五	九、七二	五、六、二四七	七、四、六	四、〇、〇五〇	四、〇、三〇	二、一、四三
十一月	一、四、三九	六二、〇三	五、九二四	四、四、四五	一、七、六五	六、五、三三	四、七、六六	四、八、二	三、七、七三	一、四、〇三
十二月	一、四、二五	六九、〇六	六、四四	四、八、二四	一、三、〇六	六、八、三三	四、五、三	二、五、九四	五、八、三三	三、五、九一

即ち最近數年に於ける各月末在庫品の状況は、明治四十五年六月以降翌大正二年三月頃迄は、一般に在庫品多量を占め、評價額亦之に準じたりしが、大正三年及び同四年は之に反し、數量及び評價額とも何れも一般に少量を示せり。然れども其の最も少量なるは、實に大正五年一月乃至三月にして、以て最近に於ける新記録を構成せり。大正六年に於ては數量は概して比較的少量なるも、評價額は一般に比較的多額に

上り、殊に九月以降を以て然りとす。蓋し斯の如く數量の比較的少量なる所以のものは、出入庫品の増減より胚胎せるの結果たるは勿論にして、價額の比較的多額なるは市價の昂騰に因るに外ならず。亦以て在荷の増減が市況の如何及び價額の騰落より因由せるの現象なるを見るべきと共に、之に據りて倉庫業者以外の一般當業者に於ける在荷の状況を察知すべし。

第五節 價格の變動

第一項 市況概観

戰亂開始の前後よりして最近に至る本品價格變動の狀を觀るに、戰前なる大正元年及び同二年は共に支那動亂の影響に因り混亂變動を示せしを以て、本品の主たる華客地同方面の需要概して不振にして、翌大正三年に至るも、依然として市況の奮興を見るに至らず。殊に綿絲の崩落は愈々市況の不振を誘致し、次いで戰亂の勃發に會し、暴落に次ぐに暴落を以てし、市場稀有の不況を示せり。同四年に至りて稍々價格昂上の曙光を見たるも、朝鮮、支那、滿洲共に取引の見るべきものなく、價格の崩落其の度を知らざるの形勢なりしが、主要輸出地たる支那天津方面の需要も、同國帝政問題の前途を危惧して買控えの商狀を現はし、一般に沈靜を續けたるも、其の間市價の高低曲折著しかりしは、主として七月以降に於ける排貨熱の旺盛、銀價の暴落に因るものと見るべく、戰亂には別段直接の因縁を有せざるものゝ如し。次いで同五年には、一時騒亂に因りて悲觀されたる支那市場も、幾許もなく財界の好調に伴うて需要を喚起するに至り、且つ英國製品の供給漸く減少し行ける印度及び濠洲、南洋方面は、其の代用品としての需要激増を見

るに至りしかば、各種綿布の輸出は促進され、同戦亂勃發以來の新記録を示すに至れり。殊に同年下半期に入りてよりは、一般經濟界の好調に乗じて世上の投機心を唆り、米、印兩棉花の強硬、因つて起る綿絲の奔騰に基き、相場日を逐うて躍進し、十一月下旬に入りてよりは、斯界空前の珍値を現出するに至れり。然るに同年末に近づき獨逸講和提議說に會し、一般財界の動搖を生じ、且つは同六年二月に於ける米獨國交斷絶に因り、本品の低落を見るに至りしが、米棉價格の復舊と共に間もなく恢復し、再び市場の股脈を見、初夏に至りては異常の昂騰を現はせしと雖も、米國參戰の結果我が對印爲替決濟の不圓滑と爲り、印棉問題に挫折せる綿絲の市價問題は一時機業界に影響を及ぼせり。爾後綿絲紡績業に於ける操業短縮の決議あるに至り、綿絲價格獨り恢復するに伴ひ、機業界も亦前日の狀況を持続するに至りたるが如し。

翻て内地向綿織物市況は、由來其の原料綿絲の市價と互に因果的關係を有し、大體上該品市價と其の浮沈を同うせるは勿論、一面輸出の消長、内地に於ける諸種の事情及び染料昂騰等と相待ち、開戦後大正四年に於ては一般に不振を免れざりしと雖も、爾後内地商工業の活躍と相待ち、市價の昂騰を促したるを以て、大正五年後に於ては一般に活況を呈し、最近綿絲暴落の餘響を蒙り、本縣郡部に於ける一部機業者は爲に一時操業休止を試むるの止むなきに遭遇せしも、幾許ならずして、綿絲價格の調節に伴ひ、大勢上恢復するに至れり。

第二項 輸出向綿布

海外輸出綿布は廣幅を主とし、其の狀況前項の如くなるを以て、其の市價の高低は一に之に左右され、

開戦當時より大正四年に亘り、一般に低落せしと雖も、大正五年以降に於ては著しく昂騰するに至れり。今主要輸出向綿布の戦前以降、最近に至る市價の變動を表示せば左の如し。

年次	月次	大正二年												大正三年											
		七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月						
Cシロチンク	一	四、八五	四、八二	五、〇九	五、〇一	五、〇三	四、八八	四、六三	四、六八	四、六八	四、六八	四、六八	四、五〇	四、四五	四、二〇	三、九〇	三、八七	三、八七	三、四〇	三、四七					
	二	一、七五	一、七五	一、七五	一、六七	一、六七	一、六七	一、三五	一、六四	一、六〇	一、五九	一、五七	一、五六	一、五五	一、四六	一、四二	一、四二	一、三四	一、二五	一、二五					
	三	四、七五	四、七五	四、七五	四、六八	四、六八	四、六八	三、四七	四、六二	四、七一	四、四二	四、四二	四、三〇	四、三〇	四、一八	三、七八	三、六七	三、四七	三、一五	三、一五					
	四	二、二五	二、二五	二、二五	二、〇八	二、〇八	二、〇八	一、七六	二、〇九	二、〇四	二、〇三	二、〇三	二、〇三	二、〇四	二、〇五	一、八七	一、七七	一、七四	一、五五	一、五五					
	五	二、六五	二、六五	二、六五	二、三八	二、三八	二、三八	二、二八	二、二八	二、二二	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、二〇	一、九八	一、八九	一、八二	一、七九	一、七九					
	六	四、六五	四、六五	四、六五	四、六六	四、六六	四、六六	三、二五	四、四七	四、六一	四、三三	四、二五	四、一五	四、一五	三、九七	三、六三	三、五二	三、四〇	三、一五	三、一五					
	七	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					
	八	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					
	九	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					
	十	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					
	十一	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					
	十二	四、六五	四、六五	四、六五	四、六四	四、六四	四、六四	四、四七	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一	四、六一					

大正四年												大正五年											
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
三、五〇	三、五九	三、五七	三、六八	三、五七	四、六九	三、四二	三、五八	三、八八	四、〇二	三、九五	四、〇八	四、一七	四、六九	四、七八	四、七三	四、六九	四、八二	四、八二	五、一二	五、三六	五、九八	六、六〇	六、一五
一、三三	一、二八	一、三五	一、三四	一、三二	一、二七	一、二三	一、二一	一、三二	一、三八	一、三六	一、四三	一、四三	一、五〇	一、五三	一、五一	一、五二	一、五七	一、七三	一、八二	二、〇四	二、三五
三、二三	三、一八	三、四八	三、五五	三、八六	三、四八	四、三六	四、一八
三六	三五	三六	三六	三五	三四	三三	三二	三五	三五	三五	三七	三七	三八	三九	三八	四〇	四〇	四二	四三
一、六二	一、五四	一、七一	一、七九	一、六三	一、五五	一、五九	一、六五	一、七六	一、八六	一、八八	一、九四	一、九七	二、一三	二、一九	二、一五	二、一八	二、〇八	二、一一	二、二〇	二、二九	二、四六	二、八五	...
一、八五	一、九五	二、〇二	二、一八	二、一三	一、八八	一、八八	一、九九	二、〇九	二、〇七	二、三五	二、二五	二、二五	二、五六	二、五七	二、三四	二、三八	二、三八	二、五一	二、六四	二、九七	三、三三
三、二三	三、〇三	三、四一	三、四七	三、三一	三、二四	三、二六	三、三二	三、三七	三、七〇	三、六八	四、四六	四、四六

即ち大正二年以降大正三年開戦前までは、各品とも一般に下落の傾向を採り、開戦後は其の打撃を蒙りて、一時は一層其の勢を増進せしも、爾後一般商工經濟界の恢復と共に、其の形勢を挽回して一般に昂上の勢を呈し、殊に大正六年春以降に於て著しく、但だ同年盛夏の頃綿絲の市價暴落の影響を蒙り、一時下落せしと雖も、爾後其の恢復と共に本品の市價も亦之に伴へり。

其他双童綾、及び双猿綾綿布の、大正六年一月以降に於ける價格の變動を示さば左表の如し。

品 種	單位	大正六年												
		一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	
		月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
双童綾	三十碼	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
双猿綾	四十碼	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三

即ち叙上兩種の綿布は、年初より漸次騰貴の趨勢を示し、八月に至りて其の最高を呈せしは、之れ亦綿

第三項 内地向綿布

内地需要の綿布は廣幅綿布も之れありと雖も、概ね小幅物にして、其の種類は實に夥しく、一々其の價格の變動を示すは、煩瑣の結果却て明晰を缺ぐの恐れあるを以て、左に一般需要の廣きもの、若くは人口に膾炙せる數品に就き、最近數年間の各月に於ける平均價格の變動を表示し、以て其の大勢を察知するの資となさん。

年次	月次	細二八	雲州	小幅三等	岡木綿	綿羽二重	佐織綿
明治四十五年 大正元年	一	四、九〇	四、一〇	三、五三	五、五〇	一、六〇	七、三
	二	四、八三	四、〇二	五、四五	五、四二	一、五〇	七、三
	三	四、九〇	四、〇六	三、四五	五、五〇	一、四三	七、五
	四	四、九七	四、〇五	三、五二	五、四二	一、四八	七、三
	五	五、〇二	四、一〇	三、五三	五、四五	一、二九	七、三
	六	四、九五	四、〇七	三、四三	五、三五	一、二九	七、三
	七	四、九五	四、〇八	三、三五	五、三三	一、七二	七、三
	八	四、九〇	四、〇〇	三、三〇	五、三〇	一、四三	七、一
	九	四、八七	三、九二	三、三〇	五、二三	一、五二	七、八
	十	四、八〇	三、九二	三、三〇	五、二三	一、四六	七、四
	十一	四、七八	三、八三	三、三二	五、一〇	一、四六	七、四
	十二	四、七八	三、九三	三、三二	五、一〇	一、四六	七、四

年次	月次	細二八	雲州	小幅三等	岡木綿	綿羽二重	佐織綿
大正二年	一	四、八〇	三、九五	三、三五	五、一五	一、三六	七、三
	二	四、八三	四、〇〇	三、四三	五、一〇	一、四〇	七、五
	三	四、七七	三、九八	三、四二	五、一〇	一、四二	七、五
	四	四、七三	三、九七	三、四八	五、〇七	一、四八	七、六
	五	四、七七	四、五〇	三、五〇	五、〇七	一、三八	七、五
	六	四、七〇	三、九五	三、三八	五、〇三	一、三五	七、五
	七	四、六三	三、八八	三、三三	五、〇三	一、三五	七、五
	八	四、六七	三、九二	三、三七	五、〇七	一、三三	七、五
	九	四、八五	四、〇五	三、四二	五、〇三	一、六七	七、五
	十	四、八三	四、〇二	三、四〇	五、〇三	一、六五	七、〇
	十一	四、七二	三、九二	三、三七	四、九八	一、六五	七、〇
	十二	四、六二	三、八八	三、四〇	四、九二	一、六五	七、〇
大正三年	一	四、六〇	三、八八	三、三七	四、八五	一、四〇	七、〇
	二	四、六七	三、九二	三、三五	四、八五	一、四〇	七、〇
	三	四、六八	三、九三	三、三二	四、八五	一、四四	七、〇
	四	四、五八	三、八八	三、二七	四、八八	一、三五	六、八
	五	四、五八	三、八七	三、二七	四、八八	一、三七	六、五
	六	四、三三	三、四七	二、八八	四、六二	一、四三	六、五
	七	四、二八	三、四七	二、八八	四、六二	一、四三	六、五
	八	四、三三	三、四七	二、八八	四、六二	一、四三	六、五
	九	四、三七	三、七〇	三、〇二	四、六二	一、三〇	六、五
	十	三、九七	三、三七	二、七三	四、五七	一、二九	六、三
	十一	三、八八	三、三八	二、七三	四、五七	一、三〇	六、三
	十二	三、八五	三、二〇	二、六三	四、二三	一、二九	六、三
十三	三、五八	二、九〇	二、四二	三、八〇	一、二三	六、〇	
十四	三、三五	二、八〇	二、三八	三、五八	一、〇三	六、〇	

大正四年											大正五年										
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
三、三二	三、六二	三、七五	三、八五	三、七五	三、四五	三、四二	三、四五	三、五八	三、六八	三、七〇	三、九〇	四、一〇	四、三〇	四、四五	四、四三	四、四〇	四、二八	四、四三	四、六三	四、四三	四、四七
二、八二	三、〇〇	三、〇三	三、一五	三、〇五	二、八〇	二、七七	二、八〇	三、〇〇	三、〇五	三、〇三	三、二七	三、三五	三、五五	三、六三	三、五七	三、五二	三、六五	三、七八	四、〇二	四、四〇	五、一七
二、四二	二、六〇	二、六〇	二、七二	二、七〇	二、四三	二、四三	二、四三	二、五三	二、六三	二、五三	二、八五	二、七五	二、九〇	三、一八	三、一二	三、一〇	三、三〇	三、三〇	三、四三	四、二八	四、二三
三、五六	三、八八	四、〇七	四、二八	四、二八	三、八八	三、八二	三、八二	四、一五	四、二〇	四、一七	四、四八	四、四五	四、九二	五、一〇	五、〇七	四、九三	四、七八	四、九〇	五、一二	五、四七	七、〇〇
一、〇五	一、〇六	一、二五	一、四五	一、四四	一、四〇	一、四〇	一、四五	一、五五	一、五一	一、五五	一、五五	一、六〇	一、七五	一、六五	一、五七	一、五五	一、六〇	一、六八	一、七五	一、八五	二、〇三
六二	六五	七〇	七五	七三	七五	七五	七五	七五	七六	七六	七六	七八	八〇	八〇	八〇	八〇	八三	八五	八五	九五	一、〇五

即ち内地向綿布は品種に據り、其の騰落の趨勢を異にするものありと雖も、大體上大正四年末頃に至るまでは漸次下落の形勢を示し、明治四十五年—大正元年頃に於ける市價は一般に高位なりしが、大正五年以降は其の形勢を一變して、一般に騰貴を示せり。開戦後に於ける市價恢復が、輸出向綿布の夫に比し遅緩なりしは、内外其の形勢を異にするを見るべきと共に、綿羽二重或は佐織縞の騰落が、其他の綿布と稍其の形勢を異にせるに注意すべきなり。

第六節 仕向地の變遷

現戰亂勃發後に於ける本市製綿布の海外仕向地は著しく擴大し、從來主たる輸出先たる滿洲、南支那、移出先たる朝鮮及び臺灣の外、更に印度、海峽殖民地、南洋、濠洲等に新販路を開拓し、其の輸出數量若くは總

大正六年										
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
六、二七	六、二五	六、五〇	七、一五	七、二七	八、四七	一一、〇〇	一一、七七	八、二〇	六、七〇	七、八七
四、九〇	五、〇二	五、二〇	五、三〇	五、七三	六、八三	九、四三	八、八七	六、九三	六、一〇	七、七〇
四、一〇	四、二三	四、三三	四、四三	四、八二	五、八五	七、九三	七、七三	五、五七	五、二〇	五、九七
七、一〇	七、一七	七、二二	七、三五	七、五二	八、九七	一一、五〇	一一、一七	八、六二	八、〇三	八、六〇
一、八四	一、八〇	一、九〇	二、〇二	二、一〇	二、五三	三、三三	三、七〇	二、二七	二、三三	二、二〇
一、〇二	一、〇二	一、〇二	一、〇二	一、〇五	一、一四	一、二五	一、二三	一、〇〇	九五	九五

輸出货量に對する割合は、本章第二節に於て表示せるが如く、特に注目に値するものあり。蓋し斯の如く發展せし所以のものは、從來是等諸國に對し供給せし歐洲諸國、即ち英吉利、獨逸、奧地利、及び和蘭、或は米國等よりの輸入激減若くは杜絶したるが爲め、勢ひ俄に本邦品の需要を喚起し、従つて從來未だ嘗て供給せざりし地方に之を開始し、或は從來極めて供給少額に止りし地方に其の増大を見るに至れり。

第七節 仕向地に於ける嗜好其他の變遷

文化の程度進歩すると共に、從來専ら需要されたる太絲にて製織されたるものは、漸く市場より遠ざかり、近年自然に細絲にて製織せるものゝ需要を生ずるに至れり。之れ云ふ迄もなく仕向地地方の文化の増進に隨伴する需要者生活程度の向上に因るものにして、殊に戰亂勃發後に於ては、英、獨品の輸入殆んど全く杜絶したるが爲め、從來太絲の粗布は細絲の細綾木綿に代り、殊に滿洲に於ける本邦細綾木綿は特に開戦以來英、米品の輸入量を漸減せしめ、僅に少額の輸入ありたる和蘭品の如きは、今日全く市場より其の姿を没し去れり。

尙ほ特筆すべきは、從來各仕向地に於て歡迎せられたる歐米品の如き糊附極めて濃厚なるものに代りて、糊附極めて稀薄なる本邦品が、次第に歡迎さるゝに至り、開戦前迄其の勢を逞ふしたる歐米品も、漸次輸出減少すると同時に、糊附薄き本邦品の却つて實用向にして、染色等にも好都合なるを知るに至り、漸次其の需要を増加し來れる一事なりとす。

斯くの如く本市製造業者は戰亂に因る天恵を享け、其後銳意細絲製品の製織輸出に努力したるの結果、

豫想外の優等品を製出し得る域に達し、現今にては各仕向地に於て相應の地盤を獲得するに至れり。然かも之れを歐米品に比較すれば、尙ほ遜色なきを保せざるが故に一層の努力を要する事を忘るべからず。

第八節 仕向地に於ける競争品との關係

戰亂勃發前に在りては、從來の仕向地以外に於ける需要は極めて僅少にして、歐米品とは其の品質に於ても、將た又價格に於ても、共に比肩すること能はずして、勢ひ之れが爲めに壓倒されつゝありしが、戰亂勃發後は漸く此の形勢を一變し、戰亂に因る仕向地市場に於ける在荷の缺乏は、遂に本邦製品の需要を喚起するに至り、現在に於ては支那に於て製出さるゝ細絲製品が、印度、南洋、濠洲等の市場に於て本邦品の敵手たるに過ぎず。歐米品の如きは戰亂の爲め、殆んど全く輸入杜絶の姿なるを以て、競争品としては現下多く之を介意するを要せざるが如しと雖も、戰後に於ける反動に備ふるが爲めには、須らく戰時中に於て一層の劃策を必要とすべし。

本市は勿論本邦製綿布の海外輸出先は、對岸支那を主とし、而して支那の中にも滿洲に對する輸出は多量に上り、殊に本市製品を以て然りとするを以て、特に今少しく滿洲に於ける主要國の輸入状況を叙せんに、元來滿洲に輸入せらるゝ綿布は、粗布、綾木綿、細綾木綿、金巾、大尺布天竺、色金巾、綿製ポプリン、綿ネル、天鵞絨、タオル等、其の製品に精粗の差異こそあれ、殆んど輸入を見ざる綿織物なし。就中其數額の最も多きは、粗布、綾木綿、細綾木綿、金巾、日本大尺幅、及び支那大尺布の數種なりとす。而して是等製品の主なる輸入國は十數年前に於ては總額の九割迄は米國にして、英國之に亞ぎ、本邦品は寔に寥

々數ふるに足らざるの狀況なりしも、日露戰役後、本邦に於ける各種産業の進歩發展に伴ひ、織布業は實に急激なる發達を來たし、遂に本邦内地に於て生産過剩となれる結果、滿洲に向つて盛に販路擴張を試みたる結果、爾後米國品の減少に反し、本邦品は破竹の勢を以て優勝なる地歩を滿蒙各地に扶植し來り、殊に歐洲戰亂後英米の供給激減せしを以て、現今に於ては殆んど日本品の獨占と云ふも不可なき盛況にして、細物の製品及び更紗、繻子類の輸入は特に非常に増加するに至れり。左に開戰當年以後に於ける英吉利、北米合衆國、日本、及び支那より滿洲に輸入したる主要各種綿布の數量を表示し、以て是等諸國と本邦との輸出關係を明にせんとす。

品 種	北米合衆國		英 吉 利		日 本		支 那	
	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年
粗 布	一八六、三七三	一一五、九四一	三九、九八一	二〇、〇四八	三、一六九、二五一	九六六、三六四	七六、六二一	二二七、五四三
	一五二、一二四	一五八、四九三	一六、〇八二	三、二七六	七五二、五二六	四三四、〇〇四	一八五、四一六	八、七八二
綾 木 綿	三〇、三〇五	四八、八一八	一、三三九	一、〇六七	三九九、六〇一	三二七、四〇七	九〇、一三〇	六三、一八六
	二六〇	二六〇	三三二、二二〇	二九〇、一九八	一四九、四九九	二四三、一六〇	二五、六八四	一三、七三九
細 綾 木 綿	六〇、〇九五	四九、七四五	七三、七一三	一二九、四三四	六八、六三九	三五〇、九三二	二五、六八四	一三、七三九
	九、二六五	九、二六五	五三、七五〇	五三、七五〇	一三、七三九	一三、七三九	一三、七三九	一三、七三九
金 巾	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年
	七、七六二、三四一	六七、〇二四、七七五	二、三、六三三	二五、〇一九	二〇、六〇一	二〇、六〇一	二〇、六〇一	二〇、六〇一

其他更紗は從來露西亞よりの輸入なりしも、開戰以來急激に其の數量を減せり。繻子類、ポプリン、及び綿ネル等は英國よりの輸入ありたるも、之れ亦開戰後其の輸入激減し、大體に於て何れも本邦品の獨占する所となれり。本邦よりの輸入量を示せば左表の如し。

品 種	大 正 三 年		大 正 四 年		大 正 五 年	
	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年
更 紗	二八二、三二四	七、六一七	七、六一七	七八、六三七	一六二、四六七	一六二、四六七
繻 子 類	一七四、一二〇	一八三、〇〇二	一八三、〇〇二	一六二、四六七	三三、三七五	三三、三七五
ポ プ リ ン	一八、一四八	三四、七三〇	三四、七三〇	九六、二五四	九六、二五四	九六、二五四
綿 ネ ル	六二、六五六	九四、一七四	九四、一七四	九六、二五四	九六、二五四	九六、二五四

第八章 金融上に及ぼしたる影響

第一節 資金運用

本市綿布製織業者は、家内工業の如き小規模經營者比較的多數を占め、其の金融は多くは大工場或は商店に就て之を行ひ、又賃織業者は其の織元より原絲或は資金の供給を受けて製織に従事せりと雖も、其の製造量は大ならずして、是等を除外せる大製造業者は、何れも比較的整備せる工場制工業組織に依りて大規

模に操業せるを以て、資金運用上に於ては多くは銀行を利用し、借入金、割引手形、輸出爲替等の形式を以て、銀行業者より資金の供給を仰ぎつゝあり。今本市主要銀行が、歐洲戰亂勃發前後より最近に至る間に於て、本市及び近郊の當業者に對する貸出狀況を説示し、以て當業界資金運用の概勢を觀んとす。

顧るに明治四十五年—大正元年より大正六年六月に至る間に於て、貸付金の最多額なるは、大正六年六月に於ける百拾八萬五千八百八拾圓にして、其の最少額なるは同二年九月に於ける貳拾九萬七百六拾八圓なるが、開戰前第一年及び第二年に於ては、時に消長なきにあらざれども、概して平調の経過を示せるに過ぎず。其の漸増は全く本市當業界の自然的發展に因るものと見るべく、此の勢は雖も戰亂勃發當年たる同三年に及び、同年下半年以後同四年初頭に亘り、貸出漸増の傾向を現はせしも、間もなく同五年上半期に至るまで、再び漸減の勢を續けたるは、一に戰亂が將來せる當業界の好調に因るものと觀るを得べく、爾來引續いて同六年六月に至る間の激増は、蓋し好調に重ぬるに好調を以てせし當業界をして、事業の擴張を餘儀なくせしめたるの結果なるべし。

次に割引手形に於ては、其の最高額なるは大正六年六月に於ける四百五拾八萬壹千九百七拾圓にして、最少額なるは同二年二月に於ける百九萬九千八百貳拾五圓なり。今其の經路を觀るに、開戰前百五拾萬圓臺の前後を往來せしと雖も、同三年現戰亂勃發當時に及んで、八月に一度百貳萬參千參百九圓に上り次いで減少の傾向を示せしは、現戰亂直接の影響に基く一時的打撃に因るものなるべく、次いで同四年には貳百萬圓臺に進み、同五年に至りては更に増大し、最近同六年に至りて遂に四百萬圓臺を突破せるが如き、以て當業界輸出貿易旺盛の結果なりと斷ずるも、敢て大過ならざるべし。

當座貸越に在りては最多額は大正六年二月に於ける七拾八萬九千貳百參拾七圓にして、最少額は第一年一月に於ける參萬七千八百八拾八圓なり。而して第一年より戰亂勃發の大正三年上半期に至るまで、殆んど何等の變調をも現はさざりしが、戰亂勃發すると同時に、恰も掌を反すが如く、八月以後急に増大を示せしも、須臾にして平靜に歸せしは、蓋し開戰影響に因る荷動きの一時停止しが爲め、勢ひ活動資金の窮乏を告げし一時的現象に外ならざるべし。爾來大正六年初頭に至る迄は、時に著しく増大せしことありと雖も、大勢上大なる増加なかりしは、輸出若くば内地販賣の般盛なりし結果、資金の運轉比較的圓滑なりしを證するものゝ如し。而して最近に於ける増大は、一に市況活躍に因る當業者の發展上、比較的多額の資金を要したる結果なりと見るを得べし。

要するに、本業資金の貸出狀態を通觀すれば、開戰當時に於ける斯界の蒙りし一時的打撃を否定する能はずと雖も、爾後開戰後異常なる斯界の般賑を窺知するを得べきと同時に、各當業者何れも極めて圓滑潤澤なる資金の供給を受け居れるものゝ如く、歐洲戰亂が本邦對外貿易上に齎したる好影響は、寔に著しきが中にも、本品の如きは其の程度殊に大にして、本市當業界も亦齊しく之れに均霑することを得たるは、實に喜ぶべき現象なりと稱すべし。今左に叙上數年間に於ける市内主要銀行の當業者に融通せし各月の資金を表示し、更に其の詳細を窺ふの資とせん。

年	次	月	次	月	貸付金	割引手形	當座貸越	合計
一	二	一	月	月	三五七、〇五二	一、三三三、七六〇	三七、一八	一、七七八、〇〇
		二	月	月	三七六、七一九	一、三六九、一八四	四一、三八八	一、七八七、二九一

明治四十五年
大正元年

三 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月

三〇六、五九七
三三四、三二八
二九一、五九一
三六、四九九
三九四、四九九
四四四、一〇九
四二、九一七
四九、八五三
三七九、三三六
五四四、二七五
一、四九三、五九八
一、四〇四、二六六
一、三〇七、七八一
一、三〇三、八三三
一、三〇三、五三二
一、一八五、七〇〇
一、一三三、二二五
一、天〇、一〇七
一、三六六、八八三
七九三、六五九
四〇、五二三
七三、八二三
六一、二二二
三八、七六五
六一、一七八
七五、九二四
六一、六三二
六〇、五〇六
六六、七〇〇
六三、七二五
一、八八三、〇四四
一、六五六、六八六
一、七六七、二〇八
一、八八六、五三三
一、七七〇、四九一
一、七五二、一四一
一、七三二、一〇六
一、七三三、九七八
一、七三九、八五〇
一、七五〇、二九五
一、〇七九、四五六
一、三二七、〇四

大正二年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一月 十二月

五四四、七五〇
五〇八、八六三
四五八、九八八
四八一、八六九
四七九、五八六
五二七、〇三三
四〇一、三八三
二九八、八五五
二九〇、七六八
三七二、一五七
五五六、〇三三
六〇三、四五〇
一、一八一、八三七
一、〇九九、八五五
一、三三八、二三四
一、三三八、六五五
一、二二八、七七八
一、一六九、三〇四
一、五五三、六〇〇
一、三七四、九七五
一、三六五、四〇六
一、三〇七、九二〇
一、四四三、一四七
一、六三八、七三二
五六、四五七
四七、九九八
七〇、〇六六
七五、〇三九
七二、六七七
六五、八〇四
七六、三三三
六〇、一四八
八三、六七六
七〇、二一八
八〇、一七六
七四、八五一
一、八八三、〇四四
一、六五六、六八六
一、七六七、二〇八
一、八八六、五三三
一、七七〇、四九一
一、七五二、一四一
一、七三二、一〇六
一、七三三、九七八
一、七三九、八五〇
一、七五〇、二九五
一、〇七九、四五六
一、三二七、〇四

大正三年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一月 十二月

五四八、八三八
四七五、五四二
四四七、六二二
四三九、七六三
五六六、九七二
六一七、五四四
四八一、二五九
四七八、八五三
五八、九七八
五八八、七五四
六五四、六三二
六六六、五二六
六四一、三〇六
五九九、九四四
四五七、四九七
三九一、七四〇
四〇一、七七四
四五六、五七六
四三五、八〇九
四二、九八六
三八〇、五六〇
四四、〇八五
四三六、四四七
三七七、六八七
一、六六九、五八一
一、五五七、四九二
一、一九四、一九〇
一、八四七、七六六
一、九三七、一〇二
一、九六九、一四〇
一、九一七、七九二
二、〇三三、三〇九
一、八九一、四四五
一、八五九、九八三
一、八八六、一〇〇
一、九〇四、八二七
一、七九三、三八七
一、六四四、一七七
一、八四一、二八六
一、八四四、七四
一、一〇一、六五〇
二、一六九、二六五
二、一〇九、五六一
二、一〇八、九三九
二、五七五、五八三
二、一〇五、二二八
二、一六五、八六二
二、四二二、三三七
七八、〇四二
九四、六〇八
一四〇、二一〇
一〇三、一六三
一一〇、四七五
九四、〇九一
八六、七五
一七四、六六六
二五五、四六〇
二七三、〇三三
三二五、八九七
八三、九九九
一三三、五〇八
一三三、八七二
一〇〇、七三三
二六七、八六五
二四、九三〇
八三、一六六
一〇九、三三〇
一一一、五〇七
六五、五〇五
五九、五六一
一六、四〇八
四六、九五三
二、二九六、四六一
二、二七、五八九
一、七八一、二二二
一、三九〇、七五二
二、一六四、五四九
二、六八〇、七六六
二、四八五、七七六
二、六七六、八五八
二、六七五、六八三
二、七二、七五〇
二、八五六、六八九
二、六五、二九二
二、六五七、二〇一
二、四三七、九九三
二、四九九、五五九
二、五〇四、三九九
二、八四六、三五四
二、七〇九、〇〇七
二、七五四、七〇〇
二、六四一、四三二
三、〇二二、六四八
二、五八八、七七四
二、七八、七二七
二、八四五、九六七

大正四年

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一月 十二月

五四八、八三八
四七五、五四二
四四七、六二二
四三九、七六三
五六六、九七二
六一七、五四四
四八一、二五九
四七八、八五三
五八、九七八
五八八、七五四
六五四、六三二
六六六、五二六
六四一、三〇六
五九九、九四四
四五七、四九七
三九一、七四〇
四〇一、七七四
四五六、五七六
四三五、八〇九
四二、九八六
三八〇、五六〇
四四、〇八五
四三六、四四七
三七七、六八七
一、六六九、五八一
一、五五七、四九二
一、一九四、一九〇
一、八四七、七六六
一、九三七、一〇二
一、九六九、一四〇
一、九一七、七九二
二、〇三三、三〇九
一、八九一、四四五
一、八五九、九八三
一、八八六、一〇〇
一、九〇四、八二七
一、七九三、三八七
一、六四四、一七七
一、八四一、二八六
一、八四四、七四
一、一〇一、六五〇
二、一六九、二六五
二、一〇九、五六一
二、一〇八、九三九
二、五七五、五八三
二、一〇五、二二八
二、一六五、八六二
二、四二二、三三七
七八、〇四二
九四、六〇八
一四〇、二一〇
一〇三、一六三
一一〇、四七五
九四、〇九一
八六、七五
一七四、六六六
二五五、四六〇
二七三、〇三三
三二五、八九七
八三、九九九
一三三、五〇八
一三三、八七二
一〇〇、七三三
二六七、八六五
二四、九三〇
八三、一六六
一〇九、三三〇
一一一、五〇七
六五、五〇五
五九、五六一
一六、四〇八
四六、九五三
二、二九六、四六一
二、二七、五八九
一、七八一、二二二
一、三九〇、七五二
二、一六四、五四九
二、六八〇、七六六
二、四八五、七七六
二、六七六、八五八
二、六七五、六八三
二、七二、七五〇
二、八五六、六八九
二、六五、二九二
二、六五七、二〇一
二、四三七、九九三
二、四九九、五五九
二、五〇四、三九九
二、八四六、三五四
二、七〇九、〇〇七
二、七五四、七〇〇
二、六四一、四三二
三、〇二二、六四八
二、五八八、七七四
二、七八、七二七
二、八四五、九六七

大正五年						大正六年					
一	二	三	四	五	六	一	二	三	四	五	六
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
三七一、六八四	四八五、八〇九	五七九、八五九	六〇七、八六八	六五〇、七九三	七二二、三九九	九三三、七六五	一、〇五四、四八九	九三四、〇四八	九三九、九一六	九六五、三〇八	一、一八〇、五八〇
二、〇五六、七〇一	二、六五一、〇六一	二、八一九、九三八	二、九八五、四九九	二、八九〇、四五四	三、〇六三、〇三三	三、七五三、一三五	四、〇〇〇、〇〇五	四、三八四、一五九	四、五〇一、七一	四、五四三、五二	四、五八一、九七〇
六七、七四二	一四五、八三九	八一、七三三	七〇、九八	九七、三三三	一〇四、〇一一	六六三、三七三	七八九、一三七	五七九、二四	五〇二、七八〇	五六九、七〇四	六七三、九六
二、四九六、二二七	三、二八二、七〇九	三、四九一、五一〇	三、六六四、二九五	三、六三八、五七〇	三、八七九、四四三	五、三四〇、三九三	五、八六三、七三二	五、八九七、四三二	五、九四四、四〇七	六、〇七八、五三三	六、四三六、四八六
三、七七九、六五九	四、一八三、六九四	四、四八二、二五	三、七六六、六五九	三、八七九、四四三	三、七六六、六五九	四、一八三、六九四	四、四八二、二五	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇
四、二四八、一五	四、一八三、六九四	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇	四、三〇三、五〇
四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五	四、八二二、一五五

第二節 金利の變動

最近數年に於て、本市銀行業者の綿織物業者及び同商人に對する資金供給は叙上の如くなるが、今翻つ

て本市一般金融界に於ける金利變動の狀況を窺ふに、大正二年は一般に前年より引縮りたるも、同三年に入りては日を逐うて閑散に傾き、同年開戦後に於ては其の影響を蒙りて幾分引縮れり。然るに大正四年に於ては開戦後に比し一般に低落し、大正五年亦略ぼ同勢にて経過せりと雖も、大正六年に至りては内外經濟事情の變調に因り、稍々引縮氣味を生じ、更に同年四月米國參戰の我が經濟界に與へたる餘響に因り、東西兩大都市に倣ひ、本市も亦金利の引上げを見るに至れり。左に明治四十五年—大正元年以降最近に至る各季末各種貸出に對する市内普通銀行の金利變動の狀況を表示せん。

次月次	貸付日歩(抵當貸)		當所割引日歩		當座貸越日歩		當座預金日歩		定期預金利率		
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	一ヶ月	三ヶ月	六ヶ月
大正三年三月	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正三年六月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正三年九月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正三年十二月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正二年三月	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正二年六月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正二年九月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正二年十二月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正一年三月	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	二、四二	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正一年六月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正一年九月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇
大正一年十二月	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	二、四三	二、三〇	五、八	五、二	五、〇

年	大正六年			大正五年			大正四年			大正三年		
	十二月	九月	三月	十二月	九月	三月	十二月	九月	三月	十二月	九月	三月
支	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇
計	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇

第三節 海外爲替取組

本市に於ける綿布の輸出地は、主に支那方面なることは既述の如くなるを以て、今本市主要銀行輸出爲替取組高を觀るも、其の取組先は支那を主とし、南洋及印度之に亞げり。戰亂勃發前なる大正二年に於ける海外爲替の取組を觀るに、七月以前に於ては之れなきも、同月以後僅かに支那への取組を見るに至れり。而して南洋及印度は戰亂勃發後に開拓したる新販路なるを以て別表の如く、大正六年一月に至る迄見るべき取組なく、本邦以外諸國の輸入漸減したるに伴ひ、之に代る少許の本邦製品の輸出を見るに至り、始めて之あるを致したり。然れども一方支那方面に於ては、時に同國の政治的、國際的動搖に因る發作的輸出

減少を見ざるに非ざりしも、概して漸増の趨向を示し、殊に歐洲戰亂の影響は最も顯著にして、他國製品の輸入激減すると同時に、本邦製品の需要激増せしを以て、爲替の取組は開戦後増加するに至れり。左表に就いて大正四年下半年以降に於ける格段なる取組高増加の比率を見れば、恐らく何人と雖も一驚を喫せざるを得ざるべし。

年	次	國	別	月												
				一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
大正二年	支	那	計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
				1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大正三年	支	那	計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
				1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大正四年	支	那	計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
				1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大正五年	支	那	計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
				1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大正六年	支	那	計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
				1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

第四節 海外爲替相場の變動

竊て本市製品と主要關係ある海外各地に對する爲替相場の變動を観るに、素より各地により其の騰落を一にせずと雖も、之を開戦後に於ける狀況を以て開戦前に比較して、其の大勢を示さんか、概觀上大正四年に於ては騰貴せしも、同五、六年に於て下落せしは、紐育、漢口、及び天津宛にして、其の反對に大正四年に於ては下落せしも同五、六年に於て騰貴せしは、香港及び大連宛とし、大正四、五年に於て騰貴せしも、大正六年に於て下落せしものには孟買宛を出し、其他芝罘宛は大體上香港及び大連宛と同勢を保てり。更には等各地宛の大正元年以降に於ける各年の相場を各前年に比較せば、紐育宛は大正二年に於ては騰貴せるも、爾後兩年は漸落し、大正六年は略ぼ前年と同勢を保ち、上海宛は大正四年迄は漸騰の勢なりしが、爾後は其の逆勢を呈せり。漢口宛は大體上上海と同勢を示し、香港、芝罘、及び大連宛は大體上大正四年迄は漸騰の趨勢なりしも、爾後其の逆勢を示し、更に孟買に至つては大正二、三年は大なる變動なく、同四、五年は漸騰を示せしも、同六年に至つては下落を呈せり。蓋し斯の如き騰落の狀況は、我が對外貿易に鮮少なからざる影響を及ぼせるや勿論なりとす。左に明治四十五年—大正元年以降最近に至る、是等各地宛の月別爲替相場を、横濱正金銀行の建直に據りて一眸裡に表示し、以て叙上年間に於ける其の騰落の趨勢を観るに左の如し。

年月次	紐育宛		上海宛		漢口宛		香港宛		天津宛		芝罘宛		大連宛		孟買宛	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
明治四十五年一月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
二月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
三月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
四月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
五月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
六月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
七月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
八月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
九月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十一月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十二月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
大正元年一月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
二月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
三月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
四月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
五月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
六月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
七月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
八月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
九月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十一月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三
十二月	四九七	四九七	七三	七三	一〇四	一〇四	七三	七三	一〇四	一〇四	九七	九七	九七	九七	一五三	一五三

第五節 代金決済

綿織物殊に輸出向綿布は常に相場の變動激烈なるが爲め、現金取引に據ること多く、且つ本市當業者の大多數は何れも大阪、神戸等に於ける仲繼商人の手を経ること既述の如くなるを以て、代金決済の如きも大體上大なる運滞なく、迅速且つ簡單に行はるゝを以て、戦亂の前後を通じ、大なる變動なく、現在に於ても殆んど其の影響として見るべきものなし。

第九章 運輸上に及ぼしたる影響

第一節 運賃の變動

第一項 海運

現戦亂勃發以降本邦海運界に及ぼしたる影響は、前數次の調査に於て報告せしが如く、著しく船腹の不足を來たし、随つて運賃は異常なる勢を以て昂騰し、内地一般製造業者及び海外輸出業者に與へし打撃は實に顯著なるものあり。茲に於てか政府は其の状況を緩和するの必要を認め、大正六年十月船舶管理令を實施するに至りしを以て、之れが爲め幾分運賃の低落を來たせりと雖も、而かも大なる緩和を見るに至らず、船腹の不足依然として舊の如くなるの結果、斯の如く騰貴せし運賃は、前途未だ俄かに大なる低落を見る能はざるの狀態なり。今試に船舶管理令發布の海運界に及ぼせる影響を觀んが爲め、大正六年の各月

中旬に於ける備船料、及び運賃の騰落を表示せば左の如し。(運賃は各航路別に據る煩雜を避け、單に内外重要航路を標準とせしを以て、他は之を類推すべし。)(單位噸)

月次	備船料		運賃		
	三千噸以上	五千噸以上	門司横濱間	九州香港間	日米間(雜貨)
一月	一、一五〇	一五、〇〇	四、七〇	八、五〇	二、〇〇
二月	一三、〇〇	一六、〇〇	五、〇〇	九、〇〇	二五、〇〇
三月	一四、五〇	一七、二〇	六、二〇	一一、〇〇	三〇、〇〇
四月	一五、〇〇	二〇、〇〇	六、二〇	一二、五〇	三五、〇〇
五月	二〇、〇〇	二四、〇〇	六、六〇	一三、〇〇	四三、〇〇
六月	二五、五〇	二七、五〇	九、〇〇	一六、〇〇	五〇、〇〇
七月	二七、五〇	三三、五〇	一〇、〇〇	一六、〇〇	五〇、〇〇
八月	三〇、五〇	三六、五〇	九、八〇	一六、〇〇	四五、〇〇
九月	三六、〇〇	四三、〇〇	一一、五〇	一八、〇〇	五〇、〇〇
十月	四〇、〇〇	四二、〇〇	九、二〇	一六、〇〇	三五、〇〇
十一月	三〇、〇〇	三八、〇〇	七、八〇	一三、〇〇	三八、〇〇
十二月	二〇、〇〇	三〇、〇〇	八、一〇	一六、〇〇	四五、〇〇

〔備考〕十月に於て前後とあるは、船舶管理令發布の前後を稱す。

即ち船舶管理令發布の爲め、一時備船料及び運賃何れも低落せりと雖も、爾後形勢を挽回して、再び昂騰を呈し、殊に運賃の如きは同令發布前と殆んど差異なきに至れり。

騰せり。

(チ)孟買 孟買への運賃は開戦後大正五年までは、大なる變動なく、大正四年九月一噸に付九圓なりしもの、同五年に至るも依然同額を保ちしと雖も、大正六年二月には拾六圓五拾錢、同六月には貳拾圓五拾錢、同九月には參拾八圓五拾圓に各々昂騰するに至れり。

(リ)其他の印度方面各港 其他彼南へは大正四年九月までは戦前と同じく一噸五圓五拾錢(大正五年四月には七圓五拾錢、同七月には拾圓五拾錢に各々昂上)、蘭貢、甲谷陀は大正五年八月までは拾圓、古倫母へは戦前より大正五年二月までは六圓にして、其の間殆んど變動を認めざりしも、爾後左の如く昂上するに至れり。

彼南	大正五年七月				大正六年		
	二月	六月	八月	九月	二月	六月	九月
蘭貢、甲谷陀	七、五〇	一七、五〇	二五、五〇	三二、五〇	一〇、〇〇	一七、〇〇	二九、〇〇
古倫母	六、〇〇	一四、五〇	一八、五〇	三四、五〇	一四、五〇	一八、五〇	三四、五〇

即ち大正五年七月を以て最近に比較すれば、彼南は四倍三割以上、蘭貢、甲谷陀は三倍七割、古倫母は五倍七割以上に達する暴騰を呈せるを觀るべし。

第二項 陸 運

(イ)内地 綿織物の陸運々賃は海運々賃の如き暴騰を來さず、戦前より大正五年十一月までは特定品

に據る運賃を徵せしも、同月十三日之を廢止して一般普通品扱に據り、唯東京、大阪、及び神戸に對し、從來の特定品扱に據ることとせり。即ち貨切一噸に對し、汐留參圓六拾錢、大阪參圓參拾九錢、湊町及び神戸各々貳圓拾六錢とす。然れども一般出貨激増に因る貨車不足の爲に、各驛の滯貨著しきに鑑み、大正六年九月倍賃制度を實施し、從來の運賃を倍加し、以て至急を要する各商品の便宜を圖ることとなるを以て、實際上運賃は一倍の昂騰をなせるものと觀るを得べし。

其他特定品扱廢止前に於ける本市重要關係地方に對する運賃は、綿絲と同一なるを以て、前回に於ける同調査に譲り之を省略す。

(ロ)朝鮮及び滿洲 本市よりの朝鮮移出は、概ね陸運に據り、當業者は運輸業者と格段なる契約の下に、輸送上の便宜を圖り、隨て其の料率は當業者に據り、差異あるを免れずと雖も、今一般的の綿布(無地物)の運賃を示さば左表の如し。

着 驛	單位	院線内		局線内		合計
		運	賃	運	賃	
釜山	百斤	四六	一九	四六	四六	四六
仁川	同	四六	三二	四六	四六	六五
平壤	同	四六	四〇	四六	四六	七八
新義州	同	四六	二五	四六	四六	八六
元山	同	四六	四二	四六	四六	七一
安東	同	四六	四二	四六	四六	八八
中編 第九章 第一節 運賃の變動 第二項 陸運						一一五

第二節 船腹及び貨車需給の状況

第一項 船 腹

現戦亂勃發當時は、一般商工業不振の爲め未だ以て船腹不足の聲を發するに至らざりしも、翌大正四年以降に於ては、戦局の進展と共に、益々船腹の不足を來たし、斯業に影響する所少なからず、爲に豫定の積入をなす能はずして、不測の損害を來たすこと稀ならず。茲に於て造船事業熱は大に昂り、盛に新船の建造をなすに至りしと雖も、造船材料の供給圓滑を缺き、未だ以て益々不足を遂げつゝある船腹を補充するに至らざりしに、米國参戦の結果大正六年九月には、同國に於ける鐵輸出の禁止となり、從來同國より其の供給を仰ぎつゝありし本邦は、之が爲に甚大の影響を蒙るに至り、前途船腹の不足は容易に救済さるゝ能はざるの形勢なり。

今試に本邦海運界の状況を觀察せんが爲め、最近五ヶ年間に於て千噸以上の船舶進水高を示さば實に左表の如し。

年次	隻數	總噸數	年次	隻數	總噸數
大正二年	四	三四、四七八	大正五年	三九	一四〇、二九五
大正三年	一九	八〇、九五九	大正六年	七〇	三〇七、一八四
大正四年	八	四〇、四八五			

即ち開戦當年の大正三年は、前年に比し著しく新造船を増加せしと雖も、翌大正四年は前年の約半數に減少せり。然れども爾後一般船腹の不足に鑑み造船事業の勃興を促し、大正五年以降に於て急激なる新船

の増加を見るに至れり。随つて總噸數千噸以上の鋼鐵船を建造し得べき造船臺數も亦左の如く激増せり。

造 船 臺 數	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年
	一七	一八	二〇	三二	一四八

即ち造船臺數の激増は實に刮目に値し、最近大正六年に於ては、前年に比し約五倍に達せりと雖も、是等新設造船所の多くは機關工場を有せず、又材料缺乏せるを以て、造船能力は遙に之れ以下にあり。且つ叙上の如く進水船舶數激増せりと雖も、他面撃沈、破損、或は外國への賣却船等の夥しきが爲め、實際の増加船舶數は實に微々たり。即ち左表を見よ。

船 種	大正五年末		大正六年十月末	
	隻數	總噸數	隻數	總噸數
汽 船	二、一六八	一、七〇一	二、一四四	一、七四九
帆 船	四四七	一、四二五	四五八	一、四六七
石 船	九、二四二	五七九	一〇、二六四	六六三
帆 船	一、一七七	三八二	一、〇六二	三四五

依之觀之、如何に船腹の不足せるかを想察し得べきにあらずや。

一般の形勢斯の如くなるを以て、綿織物に對する船腹も常に不足を告げ、當業者の困憊實に想像の外にあり。今試に戦前より最近に至る名古屋港へ入港の汽船數に據り、本市海運界の大勢を觀るに、大正三年は前年なる大正二年より増加し、大正二年は前年に比し隻數に於ては減少せしも、噸數に於ては増加を示し、大體上戦前は好調を呈せしも、開戦翌年なる大正四年に於ては何れも前年より減少し、翌大正五年は

前年に比し増加せしも、而かも噸數に於ては大正三年に及ばず。大正六年に至つては前年より著しく減少して、益々船腹不足の實績を示せり、即ち左表の如し。

年次	隻數	噸數	年次	隻數	噸數
大正二年	一、四六〇	一、二八二、二八九	大正四年	一、六七〇	一、四二〇、五七〇
大正三年	一、七五六	一、五五〇、五八一	大正五年	一、八四〇	一、五〇六、一九〇
大正六年	一、四〇八	一、四〇八、六〇九			

蓋し斯の如く大正六年に至り激減せし所以のものは、一般海運界の影響を蒙り、日本郵船株式會社に於ける本市關係海外航路に於て、漸次大船を使用するに至りしを以て、名古屋港への入港不可能となりし事情の存するとは云へ、職として一般船腹の不足に因る影響なりと稱すべし。

第二項 貨車

翻つて貨車の需給も亦開戦以來常に圓滑を缺ぎ、殊に鐵道輸送に據るを主とする綿織物に對し、鮮少なからざる打撃を蒙らしむるに至れり。鐵道院に於ても一般出貨激増に因る貨車不足を痛感し、最近に至り大に之れを増加するの計劃を樹て、今や著々其の實行に努めつつありと雖も、未だ以て一般輸送上の圓滑を來さしむるに至らず。

第三項 小運送

其他小運送なる車馬及び舢の需給は、地方的に局限さるるものなるを以て、大體に於て開戦後當分は大

なる變動を認めざりしも、漸次一般需要の増加に伴ひ、料金の昂騰を促すに至れり。即ち車馬に於ては大正五年秋頃に於て一割、翌大正六年春頃に至り二割内外の昂騰となりしが、同年晚夏愛知縣令に據り、車馬積載量の制限其他及び一般物價の昂騰等に因り、更に二割内外乃至約五割の値上を實行するに至れり。舢は大正五年秋頃までは大なる變動を見ざりしも、爾後諸物價昂騰に因る一般勞銀の増進に伴ひ、現時に於ては二割内外の昂騰を示せり。

第三節 保険料の變動

綿織物の海上保険料は、綿絲の夫れと殆んど同一にして、本市より内地各港に至る保険料は、保險金百圓に對し特擔分損擔保にて貳拾五六錢以上四拾錢内外、臺灣各港へは四拾錢乃至四拾貳參錢、朝鮮諸港へは貳拾錢内外、滿洲各港へも亦貳拾錢内外、支那各港へは貳拾五六錢乃至參拾六錢内外にして、開戦當時は一時保險界の動搖實に夥しく、殆んど名狀すべからざるの狂態を演せしと雖も、一度び戦時海上保價法の實施あるに至るや、斯界は漸次靜穩に歸し、大體上戦前に異ならざる料率に據ることとなり、以て現時に及べり。

下編 戰後に於ける經營政策

第十章 製造經營の方針

第一節 將來の經營又は組織

本市織物界に於て、三分の二内外の製造額を有する我が綿織物業の製造經營は、家内工業より其の端を發し、漸次發展して工場工業に進み、其の規模一般に廣大なるの機運を呈せしの際、現戰亂の勃發に基因し、一時不振の状態を免れざりしと雖も、爾後其の形勢を一變し、戰亂影響に基く内外經濟事情の推移に因り、外にあつては海外販路の開拓擴大となり、内にあつては製造數量の増進となり、軌近事業の擴張又は新設さるゝもの著しきのみならず、更に進んで原絲製造の兼營を試むるもの輩出するに至り、其の發展の狀實に顯著なるものあるは、中編各章所説に據りて、之を窺知するを得べし。然りと雖も此の如き比較的規模の擴大なる工場工業に據る製造經營は、之を其の然らざる家内工業に比すれば、尙ほ未だ多からずして、家内工業の小經營に據る者、依然として多數を占むるの現狀なるを以て、將來本市綿織物業をして一層の進化發展あらしむるが爲には、須らく其の經營をして、一段の向上を來さしむるの劃策に努力する所なるべからず。彼の本市製産品に對し屢々問題となれる粗製濫造の非難の如きも、其の原因素より一にして足らずと雖も、要するに製造經營上の缺陷に坐するもの鮮少なからずして、此の如きは蓋し大經營の下にある工場工業殊に機械力に據れるもの少なきに反し、小經營の下に於ける手工業に據るものに多きを

を占むるに想到せんか、此の如き非難の淵源を一掃する上に於ても、將た又斯業の利益助長策上より論ずるも、幾多群小の家内工業者をば打ちて一團となし、以て大經營の工場工業に向上せしむるを要す。若し夫れ急速に斯の如き理想を實現する能はざるの事情存せんか、漸進主義を以て漸次其の規模を擴大にし、機械力を應用し得る種類の製織に對しては、速に之を應用し、以て經費比較的不廉なる人力を成るべく省去して、所謂手工業の域を脱出し、大に製造費を節約する所なるべからず。而して斯の如き製造經營上の進歩發展を實現すべきは、實に戰時狀態の刻下を以て絶好の機會たりと稱すべく、斯くして所謂戰時狀態なる自然的の保護の下に、斯業をして愈々益々其の基礎を鞏固ならしめ、克く戰後に於ける反動に備へしむるは、斯業者の喫緊問題ならずとせんや。

製造經營の規模を擴大ならしめ、家内工業をして克く工場工業たらしむるの急務なると同時に、之を産業界の大勢より觀察せんか、所謂綜合工業制經營の有利なるは、蓋し軌近に於ける製造經營上に於ける風潮なりとす。即ち之を斯業關係工業に就て觀るに、紡績業の如きも漸次其の關係工業たる織布工業の兼營を開始するもの多きを致すと同時に、他面織布業者が其の原絲製造たる紡績業の兼營を試むるものも、亦鮮少なからざるが如し。故を以て本市に於ける織布業或は一般綿織業の健實なる發展を期圖せんが爲には、又漸次此の綜合工業制の大經營に向上せしめざるべからず。宜べなる哉本市及び其の郊外斯業者に於ても此の大勢を看取し、漸次本制を實現しつゝあり。即ち市内に於ては彼の愛知織物株式會社、郊外にあつては豊田自動紡織工場、株式會社近藤紡績所の如きは、軌近本制の下に經營されつゝありて、株式會社服部工場の如きも、亦近く原絲製造を開始せんとするの計劃ありやに傳ふ。之れ蓋し最近戰亂の餘瀝に因り本

業の利益著しきものあるに職由せること勿論にして、本市に於ける綿絲紡績業は、今や著々發展の域にありて、唯に既設工場の擴張のみならず、其の新設の計劃も亦盛ならんとするの現勢なるを以て、綿織物業者は斯の如き一般的大勢の下に、能く將來平和克復後即ち戦後に對し、萬遺策なき斯業經營の基礎を刻下に於て樹立し、且つ著々之を實現するの急務なるは、敢て贅言を要せざるべし。

第一節 製品の改良

斯業經營の規模を大ならしむるの急務なりと同時に、製品の改良を實現するの喫緊たるは勿論なりとす。由來本市は勿論一般本邦に於ける綿布は依然小幅物多くして、輸出に適する廣幅綿布は彼の如く多からざるの實狀なるを以て、本市綿織物をして、益々海外に於ける新販路を開拓し、主要輸出地たる同文同種國たる對岸支那以外、廣く海外に於ける需要を喚起し、大に輸出の増進を企圖せしめんと欲せば、克く其等需要國の嗜好及び使用に適する様、其の嗜好を參酌し、大に廣幅綿布の製造を熾盛ならしめざるべからず。内地向綿布は勿論邦人使用の慣習に従ひ小幅物なりと雖も、若し之を改良して廣幅物となさんか、蓋し輸出に適するものを出さん。即ち小幅なるが故に外人、殊に歐米人の嗜好及び使用に堪へざるが爲に、輸出し得べきものも之を輸出し得ざるが如きは、斯業の發展は勿論、海外に於ける本市製品の勢力扶植上、須らく考察焦慮する所なかるべからず。

輸出向廣幅綿布の製織は輒近大に進歩發達し、隨つて其の製品は一般に益々優良なるの傾向を有すと雖も、尙ほ未だ捺染法の不完全なるが爲に、海外需要地に於ける不評あるを以て、今後益々本綿布の海外輸

出を熾盛ならしめんと欲せば、速に捺染法の研究を遂げ、完全優秀なる製品を出すに腐心するを要す。其他綿物或は色物の如きも、輸出先に據りて各々其の風俗習慣の差異及び時好の變遷等に基き、常に變動を免れざるを以て、能く時々の變動に應じ、時好に適する製品の製出を試みざるべからず。

第三節 燃料及び動力費の低減

機械力を應用せる綿布業者にして、蒸氣力に據れる者は、輒近石炭價格の暴騰せるが爲に、少なからず製造費を高めつゝありて、斯業者に及ぼす影響實に著しきものあり。石炭價格は現下の狀勢にして變動する所なからんか、近き將來に於て低落するの見込少なく、依然として高價を保つが如くなるを以て、石炭使用の斯業者にして、燃料費又は動力費を低廉ならしめんと欲せば、石炭に比し現下尙ほ割安なる瓦斯、及び電力に轉換せざるべからず。電力料金の如きは石炭價格に反し、最近數年間に於ては漸次低下しつつあるを以て、蓋し斯業者の製造費を低下するに至らん。唯憾むらくは本市に於ける電力供給は、現下豊富ならずして、需給の關係不圓滑なりと雖も、供給者たる名古屋電燈株式會社に於ける擴張工事竣成の曉に於ては、勿論之れを救済するに至るべく、以て斯業者に便益を及ぼすに至るべし。

第四節 技術者の養成及び職工徒弟の教育

本市綿織物は、其の製産額より觀れば工場工業に據れるもの多數を占むると雖も、其の事業者より觀れば、工場工業者比較的僅少にして、依然家内工業の如き個人經營に據る小規模のもの多數を占むるを以て、

製造技術の如き、之を大規模經營に據れるものに比し、其の改良發達を圖る點に於て、遺憾なき便宜を得る能はず、勢ひ其の優秀向上を呈するに至ること遲緩たるを免れず。而かも技術の優否如何は、常に市價に影響するのみに止まらず、進んで販路の擴張上に多大の支障を來たし、延いては以て斯業の隆否盛衰の依て岐るゝ淵源たるべきを以て、製造技術の研究及び其の發達を企圖するは、實に刻下は勿論戦後經營上忽諸に附す能はざる重要問題たり。然れば製造技術の衝に當る技術者、或は職工徒弟の養成及び教育は、幸に現戰亂の好影響を蒙りて、俄然活躍するに至りし斯業の現勢を以てしても、決して等閑に附すべきにあらず、否な進んで一層之に對して努力するの要あり。之を本市に於ける家内工業に據る一般斯業者の實際に徴するに、其の技術者は多くは實地經驗を積みたる者にして、系統的正規の學校教育を受けたるもの比較的少數なるを以て、局部的の改良に對しては或は多大の支障なきが如しと雖も、斯界の大局を看取して、能く將來の形勢を洞察し、或は海外に於ける嗜好其他需要の變遷に鑑み、相當の經營或は製品の改良を事前に劃策する點に於て、萬全なるべきを保じ難きを以て、須らく此の如き缺陷を補正する所なかるべからず。

技術者の養成としては、或は相當教育ある者並に相應斯業に素養ある者を聘して、以て技術の進歩を圖るも可なり、或は成績優秀なる職工に對し學校教育を施すか、又斯業先進地に就き實地教育を受けしむるも可なり、或は技術者及び職工を海外に於ける斯業先進國に派遣して、具さに其の製造技術を見學せしめ、一面又需要地に於ける状況を視察し、以て製品改良上に資するも妙なり。職工徒弟の教育上に於ける普通教育に關しては、昨年工場法の實施ありしを以て、該法に遵據して之を勵行すべく、業務教育としては、

或は時々講習會を開催して、斯業に關する萬般の必須智識を、理論實際の兩者に涉りて之を授くべく、或は之が爲に特に技師或は教師を設け、日常從業の傍ら機に觸れ折に當り、實地的に教授する等、其他斯業の實際に於て、幾多の方法を發見するを得べし。若し夫れ各斯業者に於て、專屬の技師或は教師を聘し能はざる場合に於ては、組合に於て之を設け、適宜各斯業者を巡回せしむる、所謂巡回教授制を採用するを便宜とす。之を要するに日常製品改良を念とし、其の技術の發達向上の實現に對する不斷的努力を忘れずんば、相當期間の後には、必ずや顯著なる成績を擧ぐるべし、決して難事にあらざるべし。

第十一章 販賣政策

第一節 販路擴張の方法

販路の擴張に就ては其の方策一にして足らずと雖も、要するに常に海外視察員を派遣して、製品需要の程度及び状況、嗜好の趨向、其他販賣上萬般の状況を精査し、各製造業者をして海外の事情に精通せしむる等、消極的方策を採ると同時に、各當業者一齊に顧客を本位とし、商業道德を尊重し、益々製品の改良に努め、著實なる取引を行ふ等、凡べて積極的方策を採るに於ては、販路の擴張を豫期し得べきは蓋し自然の勢なるべく、而して彼の共同販賣制は價格の均一は勿論、製品の統一を計る最良の方策なるべきを以て、當業者の一日も早く此の方法に頼らんことを慫慂せずんばならず。

現在に於ても個人として、既に仕向地に視察員を派遣して需要状況等を調査しつゝある者あり。若くは

更に進んで支店又は出張所を設置せる者あるも、尙ほ未だ一般に亘るに至らず。之等は何れも視察員若しくは出張員をして直接同地方に於ける需要の状況、嗜好の程度等を報告せしめ、顧客の製品に對する批評要求等に基き、之れを參酌して其の需要に應せんことを努めつゝあるの結果、其の成績頗る良好にして顧客漸増の勢を呈せり。而して時々當業者の視察團體を組織して、具さに需要地の状況を視察し、之れを以て自家研究の資と爲すが如きも、亦本品輸出の發展を期する一方法たるべし。

叙上は主として海外輸出發展に就ての劃策なりと雖も、翻て内地に於ける販路の擴張も、亦大體上之に遵據し得べく、且つ海外に於けるが如き難事にあらざるを以て、之れに關する詳細なる叙述を省略せんと欲す。

第二節 販賣方法の改良

本市當業者の多數が、阪神地方の本邦又は外國商人の手を経由して間接取引を行ふは、一に其の經營の規模大ならざるを理由とするものにして、直接取引に於ける各種の煩瑣と不安とを避けんとするの結果に外ならざるは既述の如くにして、其の事情の存する所は一應首肯し得べしと雖も、商工業の發達愈々益々旺盛なる本市當業者が、依然舊慣を墨守するは決して本市輸出貿易發展の爲めに採らざる所、名古屋港の建設と各地新航路の開設とは、正に本市當業者の直接貿易を促すものなるべきが故に、逐次事業の發展を期すると同時に、從來據り來れる間接取引より更に直接取引に進まんことの、將來に於ける斯業發展上肝要なるは敢て多言を要せざるなり。

第三節 聲價維持の方策

本市當業者は何れも比較的大規模經營の工場制工業に據り、且つ輸出綿布の如きは特に嚴密なる組合の検査を経ざるべからざるを以て、幸に粗製濫造の譏りを蒙る事殆んど之れなきも、更に商業道德を尊重し、確實なる製品の製造に努め、統一せる商品を供給するは勿論、製品引渡期日其他の契約事項の勵行等、總べて顧客の要求に忠實なるに於ては、販路の擴張と相俟ちて、自ら聲價維持の方策は期せらるべきなり。

第四節 競争品に對する方策

現戰亂の影響は延いて俄に本邦製品の需要を喚起し、各仕向地に於て歐米品の代用として歡迎さるゝに至れるは既述の如し。支那に於ける綿布業は其の經營者の何國人たるを問はず、何れも主として其の職工に支那人を使用せるが爲め、工賃頗る低廉にして加ふるに自國に於て原棉の産出あり、若くは其の産地近接せるが爲め、其の製織上に得る利便極めて多く、従つて本市製品の競争者なりと雖も、品質又は製産費に於ては、大勢上我に及び難きを以て、將來に於ける對支綿布輸出貿易は、此の點に注意するを要す。蓋し支那製品には太絲使用の綿布多く、本邦製品は現在及び將來共、彼に叙上の利便ある以上、同種製品に對しては、不利なるを免れざるが如きも、細絲製品に就ては、現在克く競争に堪へ得るが如し。然れども元來同製品は全然其の織機を異にせるが爲め、從來主として太絲製品の製織を行ひたる本市當業者は、之が新設備を要すると、一は時局の影響に因り之れに比較的多額の投下資金を要するの結果、本設備の新設

容易ならざるを以て、未だ俄に細絲綿布の輸出を旺盛にし、以て支那製品との競争を避くる能はず、依然として従來に於ける太絲綿布の輸出多數を占むるに於ては、須らく彼に對抗するの劃策を必要とす。然り而して他面戦後本市の仕向地に於て歐米品との競争あるべきも、亦明かににして、同品は何れも大規模なる工場に於て、精巧なる技術に據り製織されたる優等品なるを以て、本邦製品が之等に拮抗して其の勢力を市場に於て争はんとするには、力めて價格を低廉ならしめ、確實なる商品を供給し、以て需要者の信用を高むる事に努力を要すべきは勿論にして、徒に現在の隆昌を見て直に本邦製品が、永遠に這回開拓されたる新市場に、其の勢力を持続獨占するものゝ如く樂觀するは、蓋し愚の極なるべし。

第十二章 金融政策

第一節 資金運用の圓滑

工場制工業に據る當業者は、何れも大規模なる製織輸出を行ふ者多く、又本品は其の本質上總べて販路廣汎にして、且つ價格も亦明かなるを以て、金融業者の投資物件としては、確實安固なるものなれば、從來當業者は資金融通上に於て相應の便益を得つゝあるが故に、何れも更に之れ以上の要望を有せざるものゝ如し。唯從來金融業者が固定資本に對する放資に躊躇したりしも、近來漸く之れに對して貸出を行ふの傾向を見るに至れるは、當業者一般の満足する所なるが如く、又戦亂の一影響として見るを得べく、本市金融業者に對して、更に戦亂終熄後も各當業者をして、安んじて其の事業を經營せしむると同時に、當業

者に於ても亦其の經營の堅實を期し、能く銀行業者の信用を博し、何時にても緊急必要の場合に際し、克く資金の調達及び其の運用を圓滑ならしむるを要す。

第二節 爲替取組及び代金決済の便宜助長

爲替取組及び代金決済は、本市當業者の多數が、現在の間接取引の形式を脱して、直接取引の形式に進むの日に於ては、四圍の事情よりして、或は更に今日の状態に満足すること能はず、之れ以上の進歩を必要とすべしと雖も、今日の状態に於ては先づ以て大なる苦痛を感ぜざるものゝ如し。然れども海外直接貿易と、其の附帶業務の利便如何は、互に唇齒輔車の關係を有するを以て、本市に於ける一般直接貿易業者の多くが、今日尙ほ阪神等に於て海外爲替の取組を試みつゝあるに想到せんか、本市に於ける本利便は、尙ほ未だ彼に及ばざるの證左たるべし。之を以て今後直接貿易助長上、本業務に對し更に一段の發達を促し、其の利便及び充實を企圖せざるべからず。

第十三章 運輸政策

第一節 船車の補充及び運賃の低減

開戦以來常に船舶の減少せしのみならず、我が海外輸出貿易旺盛の爲め、一般出貨の激増に因り、海に於ては内外に於ける船腹、陸に於ては貨車の各不足、實に顯著にして、之れが爲め運賃の暴騰を來たし、一般商工業者に與へたる打撃の甚大なるは、既に中編に於て絮説したるが如し。船腹の補充及び貨車増加

に因り、運賃の低落を圖るは、實に一般商工業に對する喫緊問題たり。然れば開戦後最近に於て、本邦に於ける造船工業は頓に振興し來りしと雖も、而かも一面敵艦の爲め撃沈さるる船舶の積極的減少を補ふ能はざるは勿論、進んで叙上出貨激増に因る消極的の減少を救済する能はざるを以て、此の如き船舶不足を充實せんが爲には、一層造船工業の振興を劃策するの急務なるは、毫も言を要せざる所なり。然るに造船用製鐵は本邦に於て、克く之を自給し能はず、止むを得ず最近米國よりの供給を仰ぎしが、米國参戦の結果として、大正六年九月遂に其の供給を絶たれ、本邦斯業に甚大なる打撃を與ふるに至りしを以て、船腹の充實は今後急速に豫期の成績を擧ぐる能はざるに似たるを以て、製鐵自給上、我が製鐵事業の振興は、實に造船工業上緊急事たりと云ひ得べし。假令彼の船舶管理令の實施に因り、運輸の圓滑を圖れるありと雖も、畢竟消極的政策たるのみならず、之れ亦豫期の効果あらざるものゝ如くなるを以て、今後極力船舶増加の方策に努力して、其の需給の圓滑を期すると同時に、運賃の低落を企圖するにあらずんば、戦時は勿論戦後に於ける我が對外貿易の發展、及び戦時中に得たる地歩を確保する能はざらん。又彼の鐵道院に於ける貨車増加の計劃は、時局上機宜の方策なりと雖も、未だ豫定の如き増加を見る能はざるを以て、之れ亦極力其の豫定の計劃實現上に對し腐心するにあらずんば、綿織物の如き比較的陸運に據る貨物の輸送を圓滑にする能はずして、爲に斯業上に鮮少なざる影響を與ふべし。

解及び車馬等本市内若くは本船碇泊港までの小運送は、畢竟地方的に局限されたる小問題なりと雖も、近時漸く需給の權衡を失し、其の他縣政上の爲め、運賃の昂上を來たせしを以て、之れ又其の低落の實現上、運送機關の改善を圖り、其の能率の増進を試むるの必要あり。

第二節 航路の充實

海外貿易上は勿論、内國貿易と雖も、克く本市に於ける綿織物の販路を擴大し、以て本市斯業の旺盛を企圖せんと欲せば、必ずや運輸機關の充實及び整備に待つべきもの多し。惟ふに本市に於ける綿布の輸移出は、朝鮮及び滿洲を主とし多くは陸運に據り、其の他内地輸送も亦陸運少なからず。而して現下に於ける鐵道は相應に普及せるを以て、陸運に於ては至大なる支障なきが如しと雖も、翻て海運の状況を觀察するに、今後大に航路の充實を企圖するの必要あり。今試に現今名古屋港に於ける内外直接定期航路を觀るに、實に左の如し。

航路	寄港回数	經營會社	寄港開始年月
大阪航路(大阪、名古屋間)	毎月一回	大阪商船株式會社	明治三十三年二月
北支那航路(橫濱、大連間)	毎月三回	大阪商船株式會社	明治四十一年十二月
北支那航路(橫濱、牛莊間)	毎月一回	日本郵船株式會社	明治四十五年五月
臺灣航路(橫濱、打狗間)	毎月二回	大阪商船株式會社	明治四十二年九月
北海道航路(神戸、小樽間)	毎月三回	日本郵船株式會社	明治四十五年三月
東京航路(東京、名古屋間)	毎月七八回	東京灣汽船株式會社	大正二年三月
濠洲航路(橫濱、シドニー間)	二ヶ月一回	日本郵船株式會社	大正五年二月

又内國航路に於ける臨時寄港船舶數は、九州航路を第一とし、北海道航路之に次ぎ、更に外國航路に於ける臨時寄港船舶を示せば左の如し。

航路 經營會社

航路	經營會社	寄港開始年月
孟買航路	大阪商船株式會社	大正三年十月
南洋航路	日本郵船株式會社	大正五年九月
	大阪商船株式會社	大正五年八月
米國航路	日本郵船株式會社	大正五年十月
	大阪商船株式會社	
上海航路	日本郵船株式會社	大正六年四月

斯の如く名古屋港に於ける定期の直接内國航路は稍々充實せりと雖も、直接外國航路に至つては、僅に北支那航路あるのみにして、臨時寄港船の如きも、寔に寥々たる状況にして、上海航路船の臨時寄港も僅に二回ありたるのみにして、其他の航路船も素より一時的に止りしを以て、本市に於ける直接外國航路は實に不整備不充實と云ふの外なし。之を以て本市に於ける直接外國貿易上に於ける海運の不便不利なる、實に豫想の外にあり。今後大に直接貿易の隆盛を企圖せんと欲せば、必ずや海外直接航路の充實を必要とするは勿論にして、之れが充實を實現せざる限りは、遺憾なき同貿易の發達を望み能はざるべし。幸に現戦亂の好影響を蒙りたる本市に於ける綿布は、開戦後印度方面へ對する輸出を増進し、其他濠洲等への新販路を開拓せるを以て、是等諸國に對する輸出を今後は勿論、戦後一層旺盛ならしめんと欲せば、速に是等諸國に對する直接航路の充實を企圖せざるべからず。

(大正六年十一月—十二月調査)

時局影響 綿織物業概観 終

大正七年一月二十六日印刷

大正七年一月三十日發行

【非賣品】

發行兼編輯者 犬伏節輔

名古屋市西區伊倉町二丁目二十番地

印刷者 山田良弼

名古屋市西區伊倉町二丁目二十番地

印刷所 誠社

發行所 名古屋商業會議所

326
308

終